

秋田県文化財調査報告書第139集  
弘田柵跡調査事務所年報1985

# 弘田柵跡

第60～64次調査概要

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会  
弘田柵跡調査事務所

秋田県文化財調査報告書第139集  
弘田柵跡調査事務所年報 1985

# 弘田柵跡

——第60～64次調査概要——

秋田県教育委員会  
弘田柵跡調査事務所

## 序

昭和49年に開始された弘田柵跡の調査は、本年度で満12年を迎えました。この間、文化庁をはじめ各研究機関の指導助言を仰ぎ調査・研究を積み重ねてきた結果、昨年度は「弘田柵跡Ⅰ—政庁跡—」の正報告書を世に問うことができました。また、この成果に基づく政庁跡の環境整備も史跡管理団体仙北町によって着々と進められていることは、喜びにたえない所であります。

さて、昭和60年度の調査は弘田柵跡第3次5年計画の第2年次にあたります。調査地は長森・百目木など5地区6地点で、第60～62次の学術調査であります。第60次調査は長森地区の政庁城外北側の発掘調査で、政庁の連係的建物群の一部と考えられる整穴住居跡群と、その外側に新しく区画施設と思われる溝状遺構を検出しました。第61次調査は推定内郭東門跡検出を目的とした内郭線築地土塀を追跡する調査であります。結果、従来東方に直進すると判断されていた築地土塀が丘陵東端に向って内曲することが確認され、これによって推定内郭東門跡の位置が特定されたことは大きな成果でした。第63次調査は弘田柵跡の沖積地利用の実態を把握するため本年度から新たに開始した調査で、外郭線角材列と丘陵線間の水田・畑地においてハンドボーリングによる地山レベルの計測、遺物の分布状況及び密度を記録するものです。現地表面ではわかりにくい埋れている古代の様子を少しづつではあるがとらえようとする基礎的な試みです。第63・64次調査は用排水路整備工事の現状変更に伴う調査で、ここでは外郭線南西部の角材列の現況と、多量の土器の出土によって長森丘陵北裾の遺物の散布と遺構の広がり的一端を知ることができました。本年報は以上の成果を収録したもので、これが古代城柵官衙遺跡の研究の一助になればまことに幸いです。

最後に、調査ならびに年報作成にあたって御指導・御助言をいただいた顧問、文化庁記念物課、奈良国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、秋田市秋田城跡発掘調査事務所に心から感謝申しあげるとともに、史跡管理団体仙北町・同教育委員会、千畑町・同教育委員会ならびに地元各位の御協力に対して厚く御礼申しあげます。

昭和61年3月31日

秋田県教育委員会弘田柵跡調査事務所

所長 岩見誠夫

## 例 言

- 1 本年報は、調査の速報を編集方針とし、所員が調査と整理作業にあたった。年報の作成にあたっては、次のとおり執筆分担し船木義勝が総括した。  
第1章、第2章、第3章第4節、第4章第4節……………船木義勝  
第3章第1～3節、第4章第1～3節、第5～7・10章……………山崎文幸
- 2 調査および整理作業・年報作成にあたって、下記の方々から御協力をいただいた。  
土地所有者 後藤 剛・仙北町弘田字仲谷地・大谷地・念仏谷地土地所有者各位  
団体 高梨土地改良区、千畑村土地改良区
- 3 木簡の釈読は、国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授 平川 南氏にお願した。
- 4 花粉分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 5 土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』（1976.9）を参考にした。
- 6 実測図は、国土調査法第X座標系を基準に作成した。詳細は『弘田権跡調査事務所年報1977』を参照されたい。
- 7 仙北郡千畑村は昭和61年3月1日から町制施行をしている。本年報では3月1日以降の当該箇所を千畑町と記し、それ以前は千畑村とした。

## 目 次

第1章	はじめに	1
第2章	調査計画と実績	2
第3章	第60次調査	4
第1節	調査経過	4
第2節	検出遺構	7
第3節	出土遺物	25
第4節	小 結	38
第4章	第61次調査	40
第1節	調査経過	40
第2節	検出遺構	43
第3節	出土遺物	49
第4節	小 結	50
第5章	第62次調査	52
第6章	第63次調査	58
第7章	第64次調査	60
第8章	花粉分析	64
第9章	木簡集成	70
第10章	調査成果の普及と関連活動	74

## 表 目 次

第1表	調査計画表	2	第3表	出土遺物法量一覧	37
第2表	調査実績表	3	第4表	出土遺物法量一覧	49

## 挿 図 目 次

第1図	弘田欄跽調査地区図	2-3
第2図	第60次調査地形図	4

第3図	98ライン西壁土層図	5
第4図	第60次調査遺構配置図	6
第5図	S I 332・S X 338 実測図	8
第6図	S I 731 実測図	9
第7図	S I 734・S K 779 実測図	9
第8図	S I 735 実測図	11
第9図	S I 736 実測図	11
第10図	S I 738 実測図	12
第11図	S I 745 実測図	12
第12図	S I 764 実測図	13
第13図	S I 765 実測図	13
第14図	S D 実測図	15
第15図	S K 実測図①	17
第16図	S K 実測図②	19
第17図	S K 実測図③	20
第18図	S K 実測図④	21
第19図	S X 実測図①	23
第20図	S X 実測図②	24
第21図	出土遺物①	26
第22図	出土遺物②	27
第23図	出土遺物③	28
第24図	出土遺物④	29
第25図	出土遺物⑤	30
第26図	出土遺物⑥	31
第27図	出土遺物⑦	32
第28図	出土遺物⑧	34
第29図	出土遺物⑨	35
第30図	出土遺物⑩	36
第31図	出土遺物⑪	36
第32図	第61次調査地形図	40
第33図	第61次調査遺構配置図	41
第34図	S F 75 実測図・Bベルト東壁土層図	42

第35図	S B 実測図	44
第36図	S D 実測図	46
第37図	S K · S X 実測図	47
第38図	出土遺物①	48
第39図	出土遺物②	49
第40図	内郭線位置図	51
第41図	花粉分析試料採取地点土層図	52
第42図	第62次調査地形図	53
第43図	出土遺物	54
第44図	地山地形復原図	55
第45図	遺物分布図(1)	56
第46図	遺物分布図(2)	57
第47図	第63次調査地形図	58
第48図	S A 309 土層図	58
第49図	第63次調査実測図	59
第50図	第64次調査地形図	60
第51図	A トレンチ実測図	61
第52図	B トレンチ実測図	61
第53図	第64次調査土層図	62
第54図	出土遺物	63
第55図	花粉分析試料採取地点土層図	64
第56図	花粉分析試料採取地点	65

## 図版目次

図版 1	第60次調査 (1)調査前 (2)調査前
図版 2	第60次調査 (1)調査区全景 (2)調査区近景
図版 3	第60次調査 (1)S I 731 (2)S I 734 · S K 779
図版 4	第60次調査 (1)S I 735 (2)S I 735 遺物出土状態
図版 5	第60次調査 (1)S I 736 (2)S I 736 炭化種子出土状態
図版 6	第60次調査 (1)S I 738 (2)S I 738 遺物出土状態

- 図版7 第60次調査 (1)S I 745 (2)S I 745 カマド
- 図版8 第60次調査 (1)S I 764 (2)S I 765
- 図版9 第60次調査 (1)S K 741 (2)S K 741 遺物出土状態
- 図版10 第60次調査 (1)S D 767 全景 (2)S D 767・778
- 図版11 第60次調査 (1)S D 774 (2)S K 773
- 図版12 第60次調査 (1)S X 769 (2)S D 767・S D 774 間開口部
- 図版13 第60次調査 出土遺物①
- 図版14 第60次調査 出土遺物②
- 図版15 第60次調査 出土遺物③
- 図版16 第60次調査 出土遺物④
- 図版17 第60次調査 出土遺物⑤
- 図版18 第60次調査 出土遺物⑥
- 図版19 第60次調査 出土遺物⑦
- 図版20 第61次調査 (1)調査前 (2)調査前
- 図版21 第61次調査 (1)調査区全景 (2)調査区全景
- 図版22 第61次調査 (1)S F 75全景 (2)S F 75土層
- 図版23 第61次調査 (1)S F 75近景 (2)S D 76・77全景
- 図版24 第61次調査 (1)S D 76・77近景 (2)S D 76・77近景
- 図版25 第61次調査 (1)B ベルト東壁土層 (2)遺物出土状態
- 図版26 第61次調査 (1)S B・S A 全景 (2)S B 79 - 3柱
- 図版27 第61次調査 (1)S B 80 - 6柱 (2)S A 78・86 - 3柱
- 図版28 第61次調査 (1)S B 79 - 4柱 (2)S A 84・85 - 3柱
- 図版29 第61次調査 (1)S A 785 近景 (2)S A 785 近景
- 図版30 第61次調査 (1)S D 76土層 (2)S D 77土層
- 図版31 第61次調査 (1)S K 786 (2)S K 786土層
- 図版32 第61次調査 (1)S D 783・784全景 (2)S X 781・782
- 図版33 第61次調査 (1)A トレンチ全景 (2)A トレンチ土層
- 図版34 第61次調査 (1)出土遺物
- 図版35 第62次調査 (1)試料No 1～9 採取地点土層 (2)試料No 10採取地点土層
- 図版36 第63次調査 (1)調査前 (2)S A 309
- 図版37 第64次調査 (1)A トレンチ全景 (2)B トレンチ全景



## 第1章 はじめに

ほつたのさくま

弘田権跡は秋田県仙北郡仙北町弘田・千畑町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く、大曲市の東方約6km、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩の真山・長森の丘陵を中心として、北側の烏川・矢島川・南側の丸子川(鞠子川)に囲まれた沖積地に立地する。1906(明治39)年頃から開始された高梨村耕地整理事業の際発見された埋木が、地元の後藤宙外・藤井東一 の努力によって歴史的遺産と理解され、遺跡解明の糸口が開かれた。1930(昭和5)年3月後藤宙外が調査を実施し、さらに同年10月文部省嘱託上田三平によって学術調査がおこなわれて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、1931(昭和6)年3月30日付けで国指定史跡となり現在に至っている。

1970年代になって、指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するため基礎調査を実施して遺跡の実態を把握することを目的に、1974(昭和49)年現地に「秋田県弘田権跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。さいわい、地元管理団体仙北町当局および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

現在は「弘田権跡調査要項」の第3次5年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。当弘田権跡調査事務所が設置されてからの調査成果を要約すると次のとおりである。

史跡は長森を中心とする内郭(線)と、長森・真山を含む外郭(線)に囲まれている。内郭は東西770m、南北320mの長楕円形で延長約1.76kmであり、外郭は東西1,370m、南北780mの長楕円形で延長約3.6km、面積およそ87万5千㎡である。外郭線は角材列が一列に並び、東・西・南・北に八脚門がつく。内郭線は築地土塀(東・西・南の山麓)と角材列(北の低地)が連なり、南・北に八脚門がつく。内郭北門は2回、内郭南門は4回の造営が確認できた。外郭南門・内郭南門延長上の長森丘陵上に政庁がある。政庁は板塀で区画され、政庁門を設けている。板塀の中には正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの遺構は数時期あり、これら主要建物群の基本的配置型式は創建から終末まで一貫していて、政治的機能を果していた場所と考えられる。政庁の南側板塀に接するように東前殿・西前殿がある。

出土品には、土師器・須恵器・灰釉陶器があり、ほかに木簡・墨書土器・埴などがある。木簡には「鮎海郡隊長解申請」「十六大楯二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」など文書・貢進様木簡がある。墨書土器には「懐悔」「厨」「厨家」「缶舎」「文」などがある。

管理団体仙北町は1979(昭和54)年から保存管理計画による遺構保護整備地区である内郭地域の土地買上げ事業を進めており、1982(昭和57)年からは環境整備事業を開始している。

## 第2章 調査計画と実績

昭和60年度の調査は「弘田橋跡調査要項」に基づく、第3次5年計画の第2年次にあたる。さいわい調査費については、秋田県の要求額とおりの国庫補助金の内示（総経費1,400万円のうち、国庫補助額700万円）を得たので、次のような「昭和60年度弘田橋跡調査計画（案）」を立案した。

第1表 調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査期間	備考
第60次	内郭北部 (弘田字長森)	100㎡	4月20日～8月10日	
第61次	推定内郭東門 (弘田字長森・百目木)	500㎡	8月20日～11月30日	
第62次	外郭南東部 (弘田字仲谷地・大谷地・念仏谷地)	10㎡	4月20日～11月30日	ハンド・ボーリングによる基礎調査
第63次	外郭南部 (弘田字館前)	275㎡	10月1日～10月30日	現状変更に伴う調査
第64次	外郭南西部 (弘田字島ノ木)	5㎡	10月1日～10月30日	現状変更に伴う調査
第65次	内郭北部 (弘田字長森・百目木)	15㎡	10月1日～10月30日	現状変更に伴う調査
第66次	外郭北部 (弘田字森合・本堂城同字百目木)	80㎡	10月1日～10月30日	現状変更に伴う調査
合計	7地区	1,885㎡		

昭和59年度から昭和63年度までの調査は「弘田橋跡発掘調査第3次5年計画」として立案され、顧問の指導と助言を得て実施されたものである。

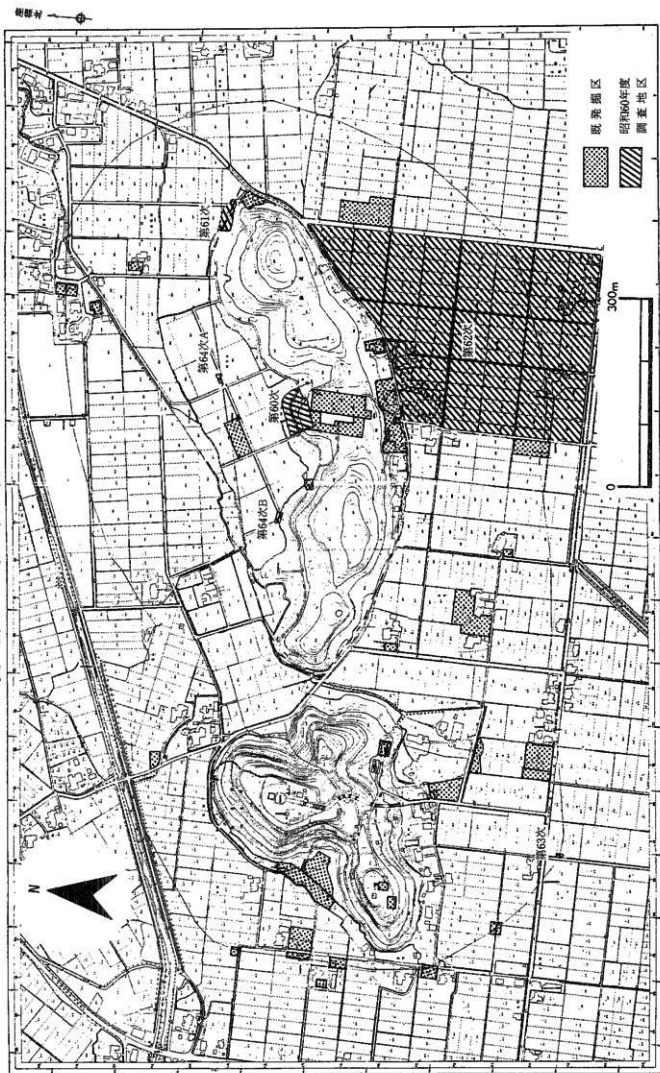
第60次調査は政庁から内郭北門に向かう長森丘陵の北側斜面を対象とし、将来の環境整備事業に対応するため西側の部分を計画したものであり、次年度以降、東半分の調査が必要である。第61次調査は第3次5年計画の基本計画である内郭東門、西門推定地の学術調査計画に基づいて計画した。第62次調査は基本計画における遺構確認調査に係わる長期計画の初年度調査である。第63～66次調査は、町道改良・水路装工・用排水路整備工事などの現状変更届出に伴う事前調査として計画したものであるが、事前協議による事業内容の計画変更を伴い、立合いなどによって事業を完了したものなどがある。

第2表 調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第60次	内郭北部 (払田字長森)	1,200㎡	4月1日～8月31日
第61次	推定内郭東門 (払田字長森・百目木)	650㎡	8月27日～11月20日
第62次	外郭南東部 (払田字仲谷地・大谷地・念仏谷地)	10㎡	11月20日～11月30日
第63次	外郭南西部 (払田字鳥ノ木)	1㎡	10月17日
第64次 A B	内郭北部 (払田字長森・百目木)	23㎡	11月20日～11月30日
合計	5地区 6地点	1,884㎡	

第60次調査は政庁北側に接する長森丘陵北斜面および丘陵裾部分の調査である。調査の結果、竪穴住居跡、溝状遺構、土壌などを検出し、政庁と連係する遺構群の一部を確認することができた。とくに、長森丘陵裾に沿い東西に走る溝は、土層の観察から板塼の可能性があり、政庁を囲む板塼と内郭線との間に、もう一つの区画施設があったことになり、重要である。第61次調査は長森丘陵の北東部にあたり、内郭東門の存在が想定される範囲の発掘を実施した。調査の結果、東西に走る築地土層が南東方向に曲がり、内郭東門は確認できなかった。推定内郭東門が「内郭北門・内郭南門と内郭線」と同様な接続のあり方を示すとすれば、本調査区の南東方向に内郭東門の存在が予想されるので、今後さらに調査を継続する必要がある。第62次調査は外郭南東部の100,000㎡(約10町歩)を対象に、坪掘りとハンド・ボーリングによる地山レベルの計測、遺物の表面採集などの記録作成を中心におこなった。調査の結果、ハンド・ボーリング調査では地山地形の様相を把握することができた。また花粉分析により古代における植生の一部を知ることができた。第63次調査は水路装工の改良工事に伴う事前調査として実施し、外郭線角材列を確認した。第64次調査は用排水路整備工事に伴う事前調査として実施した。A地点では内郭線角材列を検出できなかったが、B地点では古代の土器が多量に出土した。なお、出土遺物・図面などの資料整理は年間を通じて実施した。

史跡 弘田柵跡



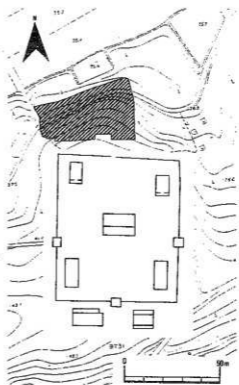
第1図 弘田柵跡発掘地区図

### 第3章 第60次調査

#### 第1節 調査経過(第2・3図、図版1)

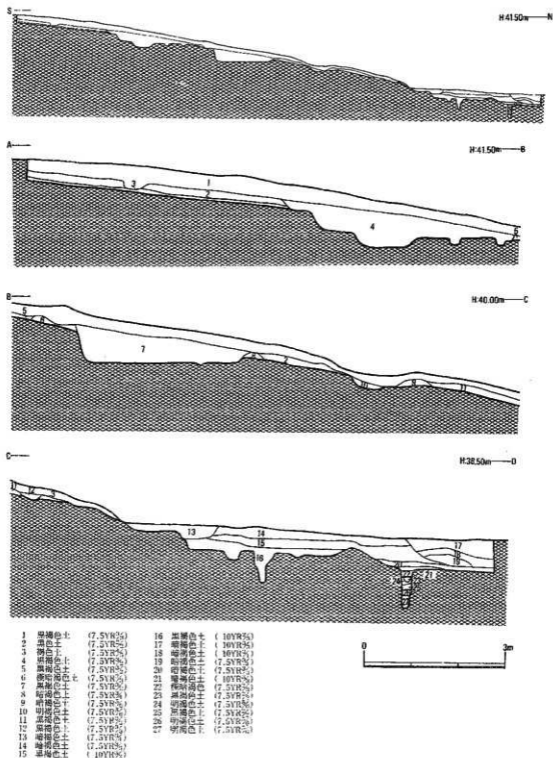
第60次調査は政庁北側に接する長森丘陵北斜面および丘陵裾部分を調査対象地区とし、(1)政庁北側の遺構の有無、(2)内郭北門とを結ぶ通路(連絡路)の検出などを目的として実施した。

調査は仙北町弘田字長森47・56・83番地内の1,000㎡を対象として行った、4月1日～5月21日の間に発掘調査準備、器材点検等を行い、22日にテント設営・器材搬入後、調査区内の杉立木の伐採作業に着手した。27日杉立木の伐採作業を完了し、ただちに杉の枝葉等の焼却処理に着手した。28・29日基準点移動・レベル移動を実施し、調査区内にグリット杭を打設した。30日地形測量および調査前調査区全景写真撮影を実施した。31日H9ライン・O1ラインに設定したトレンチの表土剥ぎを開始する。6月1日K94にて東西に走る道路状遺構を検出した。現状においても道路状遺構の延長部分が溝状にくぼんでいることから近代のものと思われる。(昭和5年に実施された文部省の発掘調査の際に自動車を使用するため、長森丘陵裾を廻る道路の一部拡幅、付け替え工事を行っており、今回検出された道路遺構はその際に廃道となった道路の一部とも考えられる。)5日丘陵裾にて竪穴住居跡(S I 731)を検出。12日斜面中腹にて竪穴住居跡3～4軒のプランを確認した。この中には政庁中軸線である98ライン上に位置する竪穴住居跡2軒も含まれており、政庁北門と内郭北門とを結ぶ通路(連絡路)を考えるうえで1つの課題となりそうである。17日第35次発掘調査で北平が未調査であったS I 332の精査を実施し、S I 332をS X 338が切っていることを再確認した。18日S I 738より完形品を含む土師器杯・皿・甕が一括出土した。26日S I 736より二面硯が出土した。27日S K 741では土師器杯・皿4個体が重なった状態で出土した。7月2日S I 736床直上を炭化物層が覆っており、炭化物層中には炭化材と共に数種類の種子が多量に混在しているのを確認した。5日S I 735の東壁南寄りにカマド様施設を検出し、燃焼部において土師器の甕と杯が

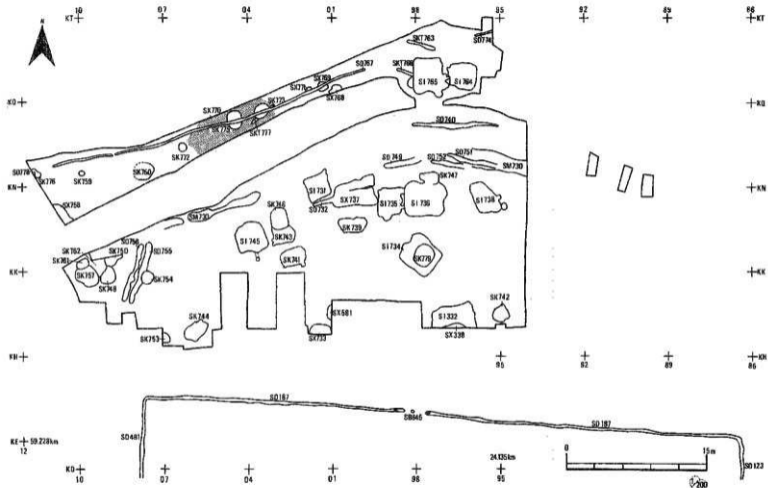


第2図 第60次調査地形図

検出した。現状においても道路状遺構の延長部分が溝状にくぼんでいることから近代のものと思われる。(昭和5年に実施された文部省の発掘調査の際に自動車を使用するため、長森丘陵裾を廻る道路の一部拡幅、付け替え工事を行っており、今回検出された道路遺構はその際に廃道となった道路の一部とも考えられる。)5日丘陵裾にて竪穴住居跡(S I 731)を検出。12日斜面中腹にて竪穴住居跡3～4軒のプランを確認した。この中には政庁中軸線である98ライン上に位置する竪穴住居跡2軒も含まれており、政庁北門と内郭北門とを結ぶ通路(連絡路)を考えるうえで1つの課題となりそうである。17日第35次発掘調査で北平が未調査であったS I 332の精査を実施し、S I 332をS X 338が切っていることを再確認した。18日S I 738より完形品を含む土師器杯・皿・甕が一括出土した。26日S I 736より二面硯が出土した。27日S K 741では土師器杯・皿4個体が重なった状態で出土した。7月2日S I 736床直上を炭化物層が覆っており、炭化物層中には炭化材と共に数種類の種子が多量に混在しているのを確認した。5日S I 735の東壁南寄りにカマド様施設を検出し、燃焼部において土師器の甕と杯が



第3図 98ライン西壁土層図



第4図 第60次調査遺構配置図

1/200

重なった状態で出土した。8日道路北側の平場部分にトレンチを東西に設定し、表土剥ぎを開始した。トレンチ西側部分は10数年前に埋め立て処理したゴミ捨場にあっており、攪乱が著しい。10日文化庁文化財保護部記念物課 佐藤信文部技官が来跡した。12日S I 745 南壁にてカマドを検出した。20日調査区西端において土壌が5基重複して検出された。23日S K 754よりフイゴ羽口が出土した。25日道路北側部分に遺方設定。26日道路北側トレンチ内においても98ライン上に位置する竪穴住居跡が検出された。29日道路北側トレンチ中央部において角礫が集中している部分を検出した。地山地形が落ち込んでいる部分に角礫が黒色土と共に入り込んでいるもので、第49次発掘調査におけるホイド井泉跡周辺の状況と似た様相を呈している。今回の調査区北に隣接する水田所有者によればこの礫群の範囲はさらに北側の水田にも拡がっているとの証言が得られたため、かなりの拡がりをもつものと思われる。30日道路北側トレンチを東西に走る溝状遺構(S D 767)を検出した。8月3日道路南側の最終平面図作成を終了する。7日国学院大学文学部 小林達雄教授が来跡する。9日H S D 767はS D 744・S D 778と一連の仕事で丘陵裾部をとりまく区画施設と思われ、一部断面において板材と思われる痕跡を認めた。またS D 767は政庁南北中軸線(98ライン)および11ライン付近にて途切れて(開いて)おり、これらの部分が政庁北門と内郭北門を結ぶ道路を探す手がかりとなるかもしれない。10日各遺構の平・断面図作成および調査区全体の最終平面図作成および調査区全体の最終平面図作成を終了する。12日～24日に各遺構の写真撮影および調査区全景写真撮影を行った。26日～30日は調査資料の整理および補足調査を実施し、31日に器材等を撤収して本調査を終了した。

## 第2節 検出遺構 (第4～20図、図版2～12)

本調査においては、53遺構を検出した。内訳は竪穴住居跡9軒、溝状遺構10条、土壌25基、道路状遺構1、その他の遺構8である。以下、順次遺構の概要を記述する。

### 1 竪穴住居跡 (第5～13図、図版3～8)

#### (1) S I 332 (第5図)

S I 734の南に位置する竪穴住居跡で、平面形は長方形を呈し、その規模は、東西約4.5m×南北約6mである。カマドは南壁中央に構築されているが、崩壊が著しく詳細は不明である。壁高は0～22cmで、北壁は削平のため現存せず、壁溝によってのみその位置を押しえることができる。壁溝は北辺と西辺の一部において確認したが、板材痕跡等は認められなかった。壁溝幅は15～40cmで、深さ3～10cmである。住居内に大小10個のピットを検出したが、主となる柱穴は認められない。床面積は24.1㎡である。S I 332は覆土中に火山灰を含むS X 338に切ら



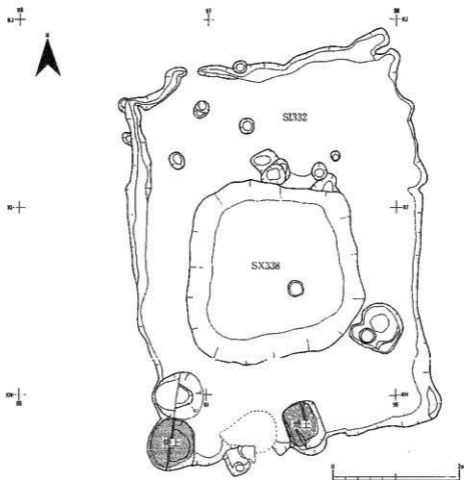
れている。

(2) S I 731 (第6図、図版3)

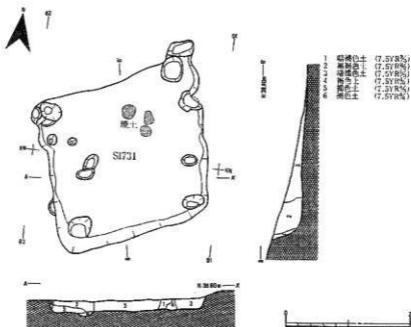
S X 737 の北西に位置する竪穴住居跡で、平面形は方形を呈し、その規模は一辺約 2.5m である。カマドは認められないが、住居中央やや北寄りの床面にて焼土を検出した。壁高は1～45cmであり、壁溝は認められない。柱穴は住居四隅にあり、径25～40cm、深さ10～29cmである。床面積は 5.6㎡である。

(3) S I 734 (第7図、図版3)

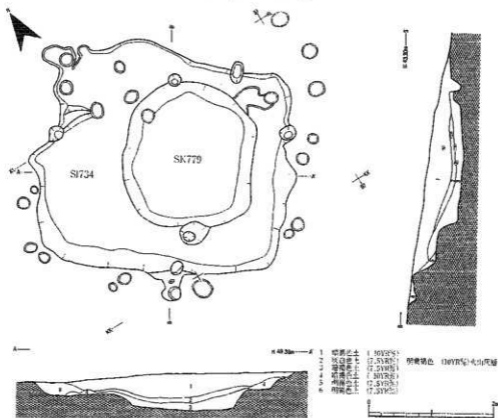
S I 736 の南に位置する竪穴住居跡で、平面形はほぼ方形を呈し、その規模は一辺3.2～3.7 m である。カマドおよび焼土等は認められない。住居内・外に小ピットを検出したが、主となる柱穴は認められない。床面積は11.2㎡である。住居中央部が覆土中に火山灰を含む S K 779 に切られている。



第5図 SI332・SX338実測図



第6図 SI731実測図



第7図 SI734-SK779実測図

(4) S I 735 (第8図、図版4)

S I 736の西に位置する竪穴住居跡で、平面形は長方形を呈し、その規模は東西約2.5m×南北約3mである。カマド様の施設が東壁南寄りに構築されており、燃焼部より土師器甕に土師器杯が重なった状態で出土した。住居中央やや北寄りの床面にて焼土を検出した。壁高は6～53cmで、壁溝は認められない。住居内・外に小ピットを検出したが、主となる柱穴は認められない。東壁際に位置する2個のピット内には角礫が数個ずつ入っているが、その用途については不明である。プラン確認時に火山灰の小ブロックを住居北壁にて少量検出した。床面積は6.9㎡である。S I 736・S X 737に切られている。

(5) S I 736 (第9図、図版5)

S I 735の東に位置する竪穴住居跡で、平面形は長方形を呈し、その規模は東西約4.3m×南北約3.5mである。炉は北壁寄りに設けられており、住居中央やや南寄り部分にも地床炉の痕跡が認められる。壁高は11～61cmで、壁溝は認められない。住居内・外に小ピットを検出したが、主となる柱穴は認められない。しかし、東・西・南壁にて検出した径15～20cm、深さ17～58cmの小ピットは壁柱の可能性が高い。覆土は大きく3層に分かれ、2層中には火山灰が混入している。第3層は床全体を覆う炭化物層で、層中からは多量の炭化物(木製品の炭化したものを含む)多量の炭化種子、土師器、須恵器、二面碗、鉄鐵などが出土している。床面積は12.1㎡である。S I 735、S K 747を切っている。

(6) S I 738 (第10図、図版6)

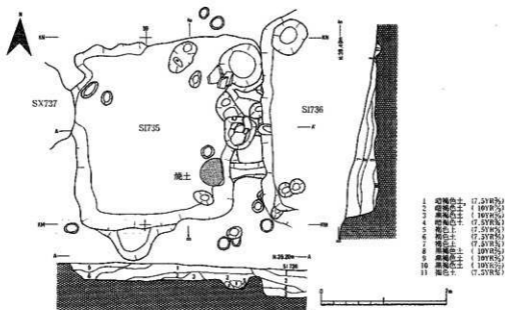
S I 736の南東に位置する竪穴住居跡で、平面形は北東部が削平のため現存しておらず現状で台形を呈している。その規模は西辺約3m、南辺約3mであることから、住居の平面形の原形は一辺が3mの方形を呈していたと思われる。カマドは東壁南寄りに構築されているが、崩壊が著しいため詳細は不明である。壁高は0～55cmで、壁溝は認められない。住居内・外に小ピットを検出したが、主となる柱穴は認められない。床面積は現状で6.6㎡である。

(7) S I 745 (第11図、図版7)

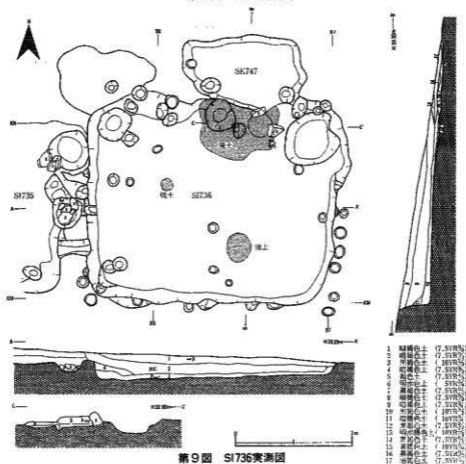
S K 743の西に位置する竪穴住居跡で、平面形はほぼ方形を呈し、その規模は一辺2.9～3.3mである。カマドは南壁中央に構築されており、煙道底面からは土師器杯・皿と角礫が出土した。壁高は1～54cmで、壁溝は認められない。柱穴は住居四隅に位置し、径30～60cm、深さ13～31cmである。2層中には火山灰が混入している。床面積は6.7㎡である。

(8) S I 764 (第12図、図版8)

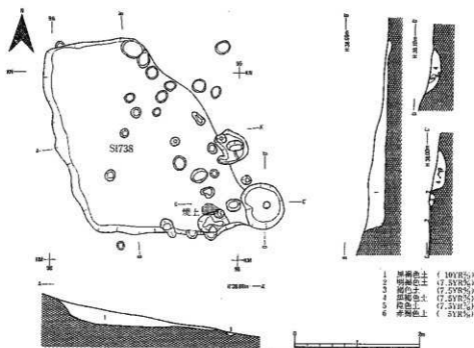
S I 765の東に位置する竪穴住居跡で、平面形はほぼ方形を呈し、その規模は一辺2.5～2.8mである。カマドは認められないが、南壁西寄り壁際床面にて焼土範囲を検出した。壁高は1～13cmで、北辺と東辺の一部において壁溝を確認したが、板材痕跡等は認められなかった。壁



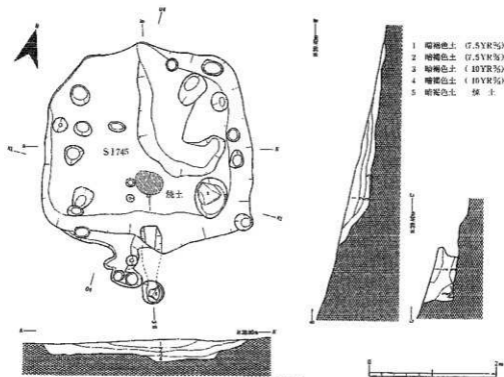
第8図 SI735実測図



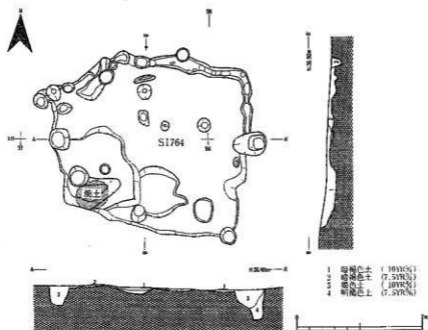
第9図 SI736実測図



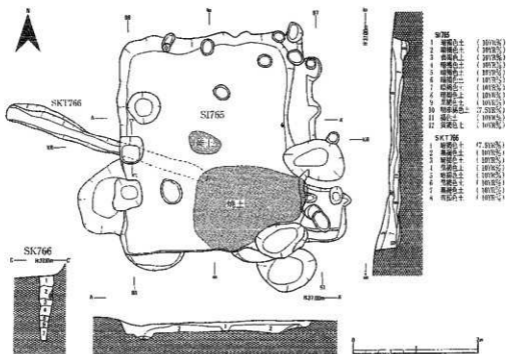
第10図 SI738実測図



第11図 SI745実測図



第12図 SI764実測図



第13図 SI765実測図

溝幅は8～25cmで、深さ5cmである。東・西辺中央および南東隅に柱穴を検出した。柱穴の径は35～50cm、深さ31～54cmで、他の各辺、各隅にはこれに対応する柱穴は認められない。プラン確認時に火山灰の小ブロックを確認した。

(9) S I 765 (第13図、図版8)

S I 764の西に位置する竪穴住居跡で、平面形は長方形を呈し、その規模は東西約3m×南北3.5mである。カマドは東壁南寄りに構築されているが、崩壊が著しく詳細は不明である。壁高は18～37cmで、壁溝は認められない。住居内・外に小ピットを検出したが、主となる柱穴は認められていない。床面積は8.2㎡である。S K T 766を切っている。

2 溝状遺構 (第14図、図版10・11・12)

(1) S D 732 (第19図)

S X 737の西壁から西に延びる溝状遺構で、全長2.2m、幅40～50cm、深さ8cmである。S X 737との新旧関係は不明である。

(2) S D 740 (第14図)

S I 764・765の南を東西に走る溝状遺構で、全長6.7m、幅20～55cm、深さ7～13cmである。S D 740の南をS D 749・751・752の3条の溝が平行して走っているが、両者の関係は不明である。

(3) S D 749 (第14図)

S I 735の北を東西に走る溝状遺構で、全長4.4m、幅51～60cm、深さ4～10cmである。S D 751・752が東西に連なるように走っているが、連続するものではない。

(4) S D 751 (第14図)

S D 752の北を東西に走る溝状遺構で、全長5.62m、幅40～70cm、深さ13cmである。近接するS D 752・749との関係は不明である。さだかでは無いがS M 730よりは古いと思われる。

(5) S D 752 (第14図)

S D 751の南を東西に走る溝状遺構で、全長3.5m、幅17～54cm、深さ9cmである。近接するS D 749・751との関係は不明である。

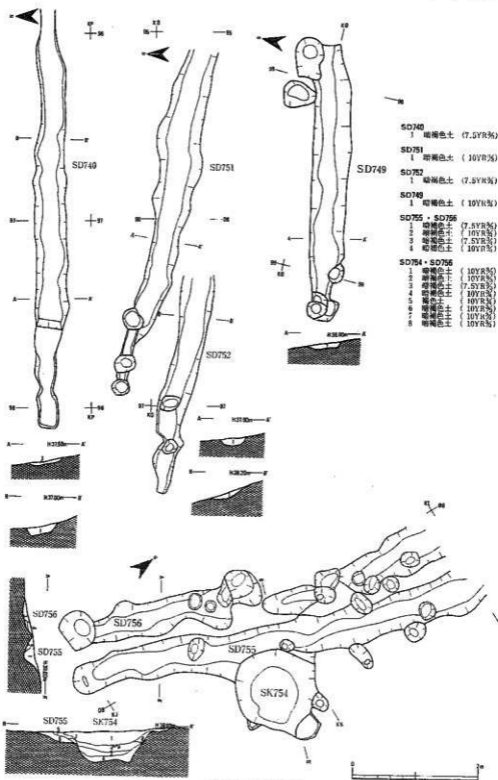
(6) S D 755 (第14図)

S K 754の西をS D 756と平行して走る溝状遺構で、全長6.5m、幅50～65cm、深さ13～17cmである。平行して走るS D 756との新旧関係は不明だが、S K 754には切られている。

(7) S D 756 (第14図)

S D 755の西を走る溝状遺構で、全長5.65m、幅55～70cm、深さ7cmである。平行して走るS D 755との新旧関係は不明である。

(8) S D 767 (第4・18・20図、図版10)





調査区北部を東西に走る溝状遺構で、全長 35.42m、幅 8～46cm、深さ 5～32cmである。溝床面においてほぼ 6 尺等間にピットを検出したが、柱痕跡、柱掘形などは認められなかった。しかし一部断面においては厚さ 5～16cmの板材痕跡を認めた。これから推察するに、SD 767 は板塼もしくはそれに準ずるような区画施設であったと思われる。おそらく SD 767 は SD 774・778と一連の仕事であり、一区画施設を構成するものであろう。溝の途切れる SD 767・SD 774 間の開口部には出入り口を想定しても大過無いものと考えられ、SD 767・SD 774 間は政庁中軸線である 98 ラインを中心として 12.3m が開口部となっている。また SD 767・SD 778 間は幅 1.8m と狭く、また SD 767 西端は他の溝 (SD 774・778) の東端とは異なり徐々に細く、浅くなり途切れることなどから、現状では開口部であり出入り口と想定することも可能ではあるが、むしろ構築段階では SD 778 と連続し、遮蔽していたものと考えられる。SD 767 は SK 773・775・SK T 777・SX 769～771 を切っている。SK 773 第 3 層中には火山灰が混入しており、これを切る SD 767 は火山灰降下以後の仕事である。

(9) SD 774 (第14図、図版11)

SI 764 の北東部に位置し、東西に走る溝状遺構で、東側未調査区へさらに延びている。現長 1.96m、幅 15～22cm、深さ 12cm である。西端にピットが認められ、径 15cm、深さ 12cm である。SD 767・778 と同一の仕事である。

(10) SD 778 (第15図、図版10)

SK 776 の北西に位置し、東西に走る溝状遺構で、西側未調査区へさらに延びている。現長 61cm、幅 19cm、深さ 9～11cm である。SD 767・774 と同一の仕事であり、構築時には SD 767 と連続していたと思われる。

3 土壌 (第15～18図、図版 9・11)

(1) SK 733 (第15図)

SX 581 の南西に位置し、不整形を呈する遺構で、現状で東西 2.4m、南北 1m、深さ 83cm である。

(2) SK 739 (第15図)

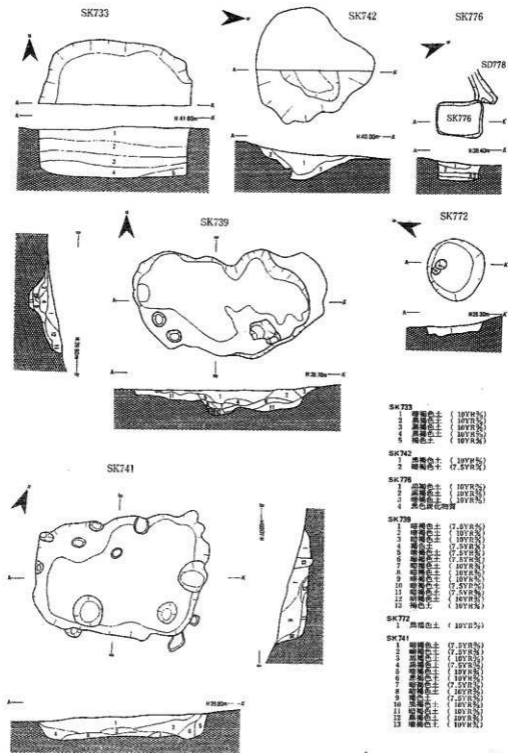
SX 737 の南に位置し、不整形を呈する遺構で、東西 3m、南北 1.55m、深さ 40cm である。

(3) SK 741 (第15図、図版 9)

SK 743 の南に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸 2.73m、短軸 1.87m、深さ 40cm である。東壁際から土師器杯・皿が 4 個体重なって出土した。

(4) SK 742 (第15図)

SI 332 の東に位置し、不整形を呈する遺構で、東西 1.85m、南北 1.9m、深さ 43cm である。



第15図 SK実測図①

(5) SK 743 (第16図)

SI 745の東に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸2.65m、短軸1.65m、深さ39cmである。SK 746に切られている。

(6) SK 744 (第16図)

SK 753の東に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸3.35m、短軸2.1m、深さ26cmである。覆土中より内面に漆の付着した土師器杯破片が出土した。

(7) SK 746 (第16図)

SI 745の東に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸2.2m、短軸1.85m、深さ10cmである。SK 743を切っている。

(8) SK 747 (第9図、図版5)

SI 736の北に位置し、不整形を呈する遺構で、東西2.05m、南北1.28m、深さ18cmである。SI 736に切られている。

(9) SK 748 (第17図)

SK 757の西に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸1.96m、短軸1.65m、深さ45cmである。SK 750・757・762を切っている。

(10) SK 750 (第17図)

SK 748の北に位置し、不整形を呈すると思われる遺構で、現状で長軸1.95m、短軸94cm、深さ4～5cmである。SK 762と接しているが、新旧関係は不明である。

(11) SK 753 (第18図)

SK 744の西に位置し、不整形を呈するものと思われる遺構で、現状で東西83cm、南北1.05m、深さ31cmである。

(12) SK 754 (第14・16図)

SD 755の東に位置し、不整形を呈する遺構で、東西1.6m、南北1.4m、深さ45～50cmである。覆土中よりフイゴ羽I・I・鉄滓等が出土している。SD 755を切っている。

(13) SK 757 (第17図)

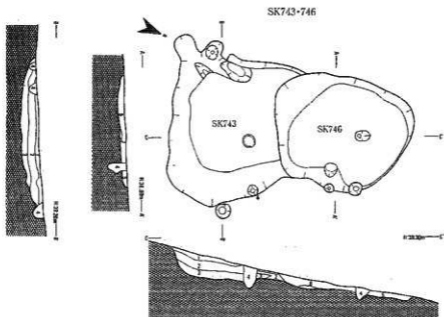
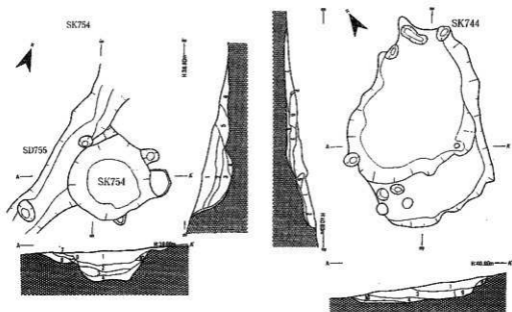
SK 748の西に位置し、不整形を呈する遺構で、東西2.15m、南北2.9m、深さ68cmである。SK 748・761に切られている。SK 762と接しているが、新旧関係は不明である。

(14) SK 759 (第18図)

SX 758の北に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸78cm、短軸65cm、深さ10cmである。底面に薄く灰が堆積している。

(15) SK 760 (第18図)

SK 772の西に位置し、不整形を呈すると思われる遺構で、現状で長軸2m、短軸1.2



SK754	
1	暗褐色土 (10VR%)
2	暗褐色土 (10VR%)
3	暗褐色土 (7.5VR%)
4	暗褐色土 (10VR%)
5	暗褐色土 (10VR%)
6	暗褐色土 (10VR%)
7	暗褐色土 (10VR%)
8	暗褐色土 (10VR%)
9	暗褐色土 (7.5VR%)
10	暗褐色土 (7.5VR%)

SK743 SK746	
1	暗褐色土 (10VR%)
2	暗褐色土 (10VR%)
3	暗褐色土 (10VR%)
4	暗褐色土 (10VR%)
5	暗褐色土 (7.5VR%)
6	赤褐色土 (5V1%)
7	赤褐色土 (7.5VR%)

SK744	
1	暗褐色土 (7.5VR%)
2	暗褐色土 (7.5VR%)
3	暗褐色土 (7.5VR%)
4	暗褐色土 (7.5VR%)
5	暗褐色土 (7.5VR%)
6	暗褐色土 (7.5VR%)
7	暗褐色土 (7.5VR%)
8	暗褐色土 (10VR%)
9	暗褐色土 (7.5VR%)
10	暗褐色土 (7.5VR%)



第16図 SK実測図②

m、深さ36~42cmである。

(16) SK 761 (第17図)

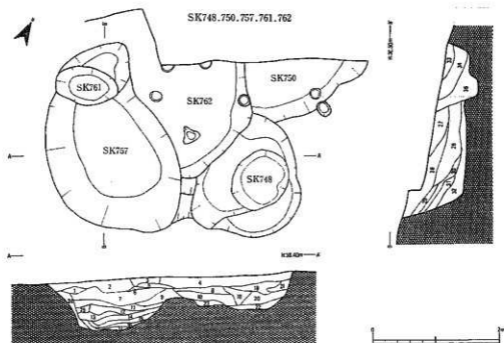
SK 757の北に位置し、不整形円形を呈する遺構で、長軸1.3m、短軸90cm、深さ35cmである。SK 757を切っている。SK 762と接しているが、新旧関係は不明である。

(17) SK 762 (第17図)

SK 761の東に位置し、不整形を呈すると思われる遺構で、現状で東西1.9m、南北1.9m、深さ4~9cmである。SK 748に切られている。SK 750・757・761と接しているが、新旧関係は不明である。

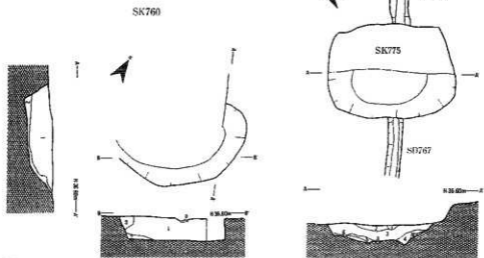
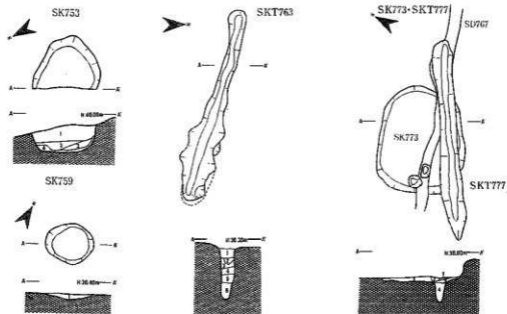
(18) SK T 763 (第18図)

SI 765の北に位置するTピットで、長軸3.15m、短軸25~50cm、深さ83cmである。



- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 褐色土 (7.5VR%)  | 21 明褐色土 (7.5VR%) |
| 2 暗褐色土 (10VR%)  | 22 褐色土 (7.5VR%)  |
| 3 褐色土 (7.5VR%)  | 23 暗褐色土 (10VR%)  |
| 4 褐色土 (7.5VR%)  | 24 黄褐色土 (10VR%)  |
| 5 黄褐色土 (10VR%)  | 25 褐色土 (7.5VR%)  |
| 6 黄褐色土 (10VR%)  | 26 暗褐色土 (10VR%)  |
| 7 褐色土 (7.5VR%)  | 27 暗褐色土 (10VR%)  |
| 8 黄褐色土 (10VR%)  | 28 暗褐色土 (10VR%)  |
| 9 黄褐色土 (10VR%)  | 29 暗褐色土 (10VR%)  |
| 10 黄褐色土 (10VR%) | 30 黄褐色土 (10VR%)  |
| 11 褐色土 (7.5VR%) | 31 明褐色土 (7.5VR%) |
| 12 褐色土 (7.5VR%) | 32 黄褐色土 (10VR%)  |
| 13 褐色土 (7.5VR%) | 33 褐色土 (7.5VR%)  |
| 14 褐色土 (7.5VR%) | 34 褐色土 (7.5VR%)  |
| 15 褐色土 (7.5VR%) | 35 暗褐色土 (10VR%)  |
| 16 褐色土 (7.5VR%) |                  |
| 17 褐色土 (7.5VR%) |                  |
| 18 黄褐色土 (10VR%) |                  |
| 19 褐色土 (7.5VR%) |                  |
| 20 褐色土 (7.5VR%) |                  |
- 黄褐色土 (10VR%) 明褐色土 (7.5VR%)

第17図 SK実測図①



- SK753**
- 1 暗褐色土 (7.5YR 5/2)
  - 2 黒褐色土 (7.5YR 5/1)
  - 3 褐色土 (7.5YR 5/3)
  - 4 灰色土 (7.5YR 5/1)

- SK763**
- 1 暗褐色土 (7.5YR 5/2)
  - 2 黒褐色土 (7.5YR 5/1)
  - 3 暗褐色土 (7.5YR 5/2)
  - 4 黒褐色土 (7.5YR 5/1)
  - 5 暗褐色土 (7.5YR 5/2)
  - 6 暗褐色土 (7.5YR 5/1)

- SK773**
- 1 黒褐色土 (10YR 5/1)
  - 2 暗褐色土 (7.5YR 5/1)
  - 3 暗褐色土 (10YR 5/2)
  - 4 暗褐色土 (7.5YR 5/2)

- SK760**
- 1 暗褐色土 (10YR 5/2)
  - 2 暗褐色土 (10YR 5/1)
  - 3 褐色土 (10YR 5/3)

- SD775**
- 1 暗褐色土 (10YR 5/2)
  - 2 暗褐色土 (10YR 5/1)
  - 3 暗褐色土 (7.5YR 5/2)
  - 4 暗褐色土 (10YR 5/2)
  - 5 暗褐色土 (10YR 5/2)
  - 6 暗褐色土 (7.5YR 5/2)

第18図 SK実測図④

(19) SK T 766 (第13図、図版8)

SI 765の西に位置するTピットで、長軸3.4m、短軸25~40cm、深さ1.03mである。SI 765に切られている。

(20) SK 772 (第15図)

SK 760の北東に位置し、円形を呈する遺構で、径約95cm、深さ13cmである。底面に薄く灰が堆積している。

(21) SK 773 (第18図、図版11)

SK 775の東に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸1.7m、短軸1.3m、深さ28cmである。覆土中に火山灰を含んでいる。SK T 777・SX 770を切り、SD 767に切られている。

(22) SK 775 (第18図)

SK 773の西に位置し、不整形円形を呈する遺構で、長軸2m、短軸1.5m、深さ32cmである。SX 770を切り、SD 767に切られている。

(23) SK 776 (第15図)

SD 778の東端に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸73cm、短軸54cm、深さ30cmである。SD 778と接しているが、新旧関係は不明である。

(24) SK T 777 (第18図)

SK 773の南に位置するTピットで、長軸3.2m、短軸25~35cm、深さ44cmである。SX 770を切り、SK 773・SD 767に切られている。

(25) SK 779 (第7図、図版3)

SI 734上に位置し、不整形円形を呈する遺構で、長軸2.3m、短軸2.07m、深さ59cmである。覆土中に火山灰を含んでいる。SI 734を切っている。

#### 4 道路状遺構

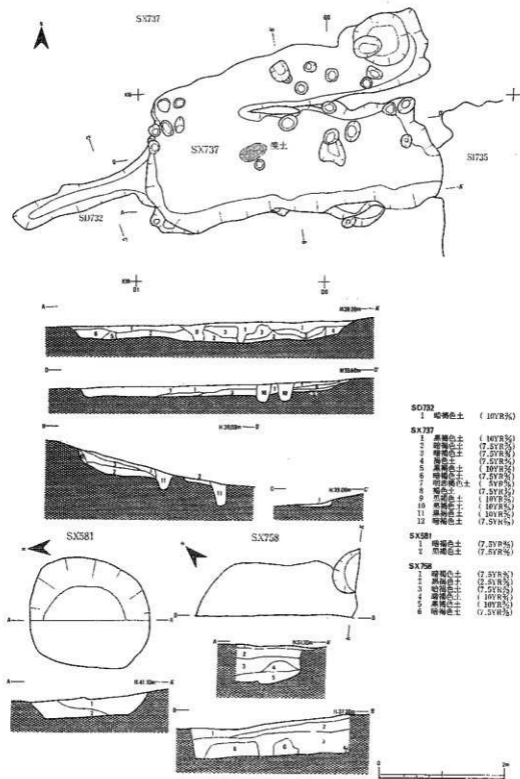
##### SM 730

丘陵裾を東西に走る道路状遺構である。幅0.35~1.3mで、断続的に全長40.3mを確認した。調査以前の地形においても溝状にくぼんでおり、近代のものと思われる。昭和5年に実施された文部省の発掘調査時に、自動車を使用するため長森丘陵裾を廻る道路の一部拡幅・付け替え工事を行っており、この道路状遺構はその際に廃道となった道路の一部とも考えられるが、確証は得られなかった。

#### 5 その他の遺構 (第19・20図、図版12)

##### (1) SX 338 (第5図)

SI 332上に位置し不整形を呈する、第35次発掘調査において検出した遺構である。東西2.84m、南北2.9m、深さ65cmである。覆土中に火山灰を含み、SI 332を切っている。





(2) SX 581 (第19図)

SK 733の北に位置し不整形円形を呈する。第53次発掘調査において検出した遺構である。東西1.92m、南北1.9m、深さ32cmである。

(3) SX 737 (第19図)

SI 735の西に位置し、不整形を呈する遺構で、東西4.7m、南北2.7m、深さ15~34cmである。覆土中には火山灰がブロック混入しており、中央やや西よりでは焼上を検出した。SD 732と接しているが、両者の新旧関係は不明である。

(4) SX 758 (第19図)

SK 776の南に位置し、不整形を呈すると思われる遺構で、現状で東西80cm、南北2.5m、深さ55cmである。覆土中に多量の遺物を含んでいる。

(5) SX 768 (第20図)

SX 769の南東に位置する焼土遺構である。不整形を呈すると思われ、現状で長軸1.45m、短軸75cm、深さ17cmである。

(6) SX 769 (第20図、図版12)

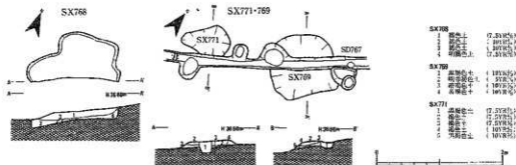
SX 771の東に位置する焼土遺構である。不整形を呈し、長軸1.12m、短軸1m、深さ12cmである。SD 767に切られている。

(7) SX 770

調査区北部中央にて検出された薬罫で、東西10.5m、南北10.15mを確認した。北側水田所有者の証言からさらに北に延びているものと思われる。他からは罫が出土しておらず作偽的なものを感じるが、平・断面の観察においてその確証を得ることはできなかった。SK 773・775・SK T 777・SD 767はすべてSX 770以降のものである。

(8) SX 771 (第20図)

SX 769の西に位置する焼土遺構である。不整形を呈し、長軸80cm、短軸49cm、深さ10cmである。SD 767に切られている。



第20図 SX実測図②

## 第3節 出土遺物 (第21～31図、図版13～19)

## 1 整穴住居跡出土土器 (第21～26・29～31図、図版13～19)

## (1) S I 332 (第21図)

**須恵器** 1はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。

## (2) S I 734 (第21・29図、図版13・14・18)

**須恵器** 10は長頸壺である。体部外面に平行叩き目痕跡が認められ、その後内・外面にロクロ調整を施している。

**土師器** 2・3はロクロ成形の皿である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。4～9はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りである。4は風化のため調整の有無は不明であるが、5～9は無調整である。11は長胴甕である。体部下半にヘラケズリ→ヘラナデ調整、体部上半にロクロ調整を施している。12は鉢である。体部下半はヘラケズリ→ヘラナデ調整を施している。底部は砂底を呈しており、高台を貼付後ナデ調整を施している。

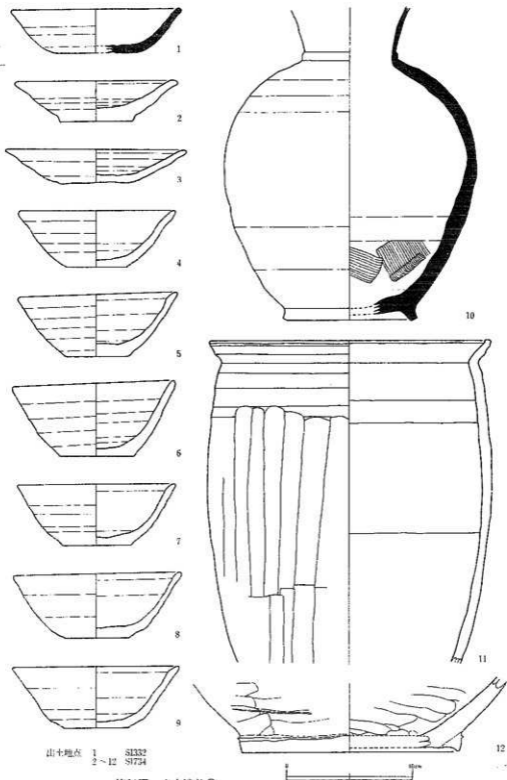
## (3) S I 735 (第24図、図版13・14)

**土師器** 29はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。30は小形甕である。全体にロクロ調整を施しており、底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。

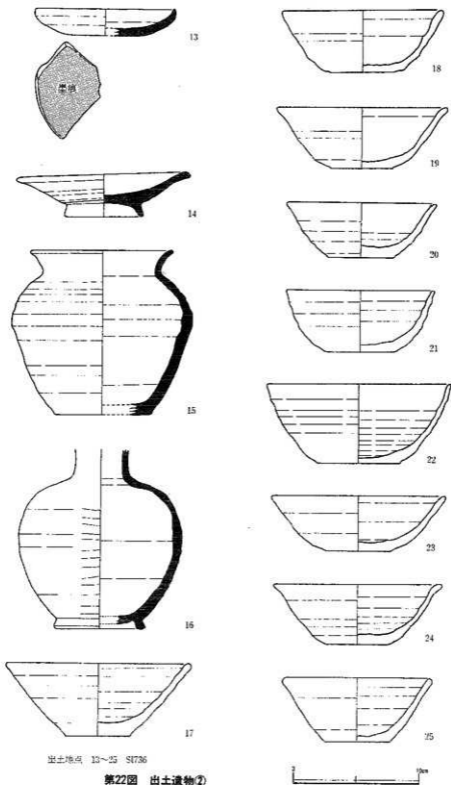
## (4) S I 736 (第22・23・30・31図、図版13～15・17・19)

**須恵器** 13はロクロ成形の皿である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。内面は碗に転用されている。14はロクロ成形の高台付き皿である。底部切り離しは回転糸切りである。高台を貼付後ナデ調整を施している。15はロクロ成形の小形甕である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。16・26は長頸壺である。体部下半にヘラケズリ→ロクロ調整、体部上半にロクロ調整を施している。27はロクロ成形の小形壺である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。全体に自然釉がかかっている。28は大形甕である。体部外面は平行叩き目、体部内面下部は平行叩き目あて板痕跡→カキ目、同上部は同心円叩き目痕跡が認められる。全体に自然釉がかかっている。

**土師器** 17～21・23～25はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。22はロクロ成形の大形杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。

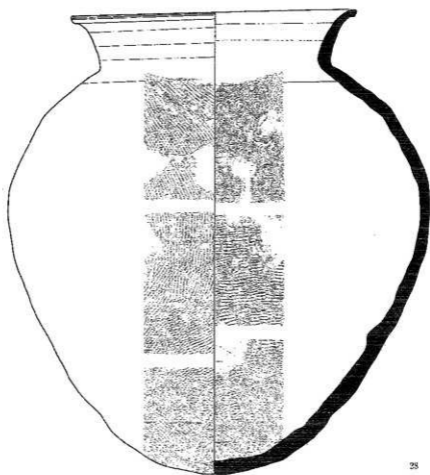
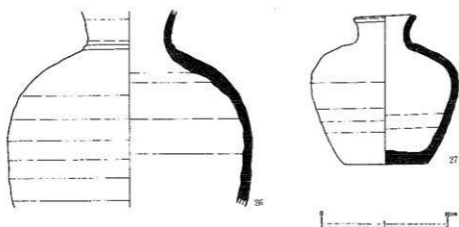


第21図 出土遺物①



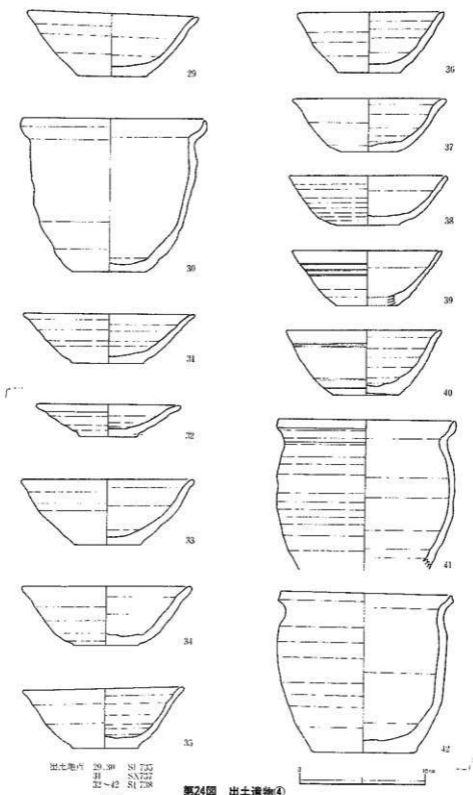
出土地点 13~25 S1736

第22図 出土遺物②



出土地点 26~28 94736

第23図 出土遺物③



出土地片 29, 30 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42

第24図 出土遺物④

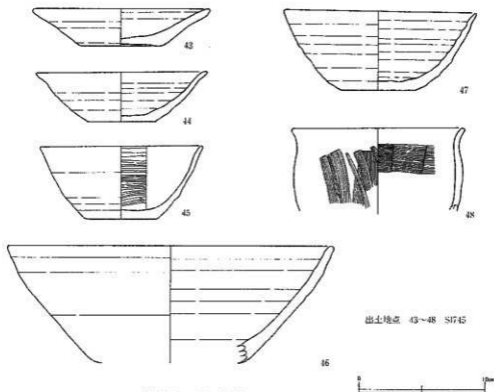
(5) S I 738 (第24図、図版13・14・16)

**土師器** 32はロクロ成形の皿である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。33~40はロクロ成形の杯である。33・34~40の底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。35は風化のため、切り離しおよび調整は不明である。41・42は小形甕で、全体にロクロ調整を施している。42の底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。

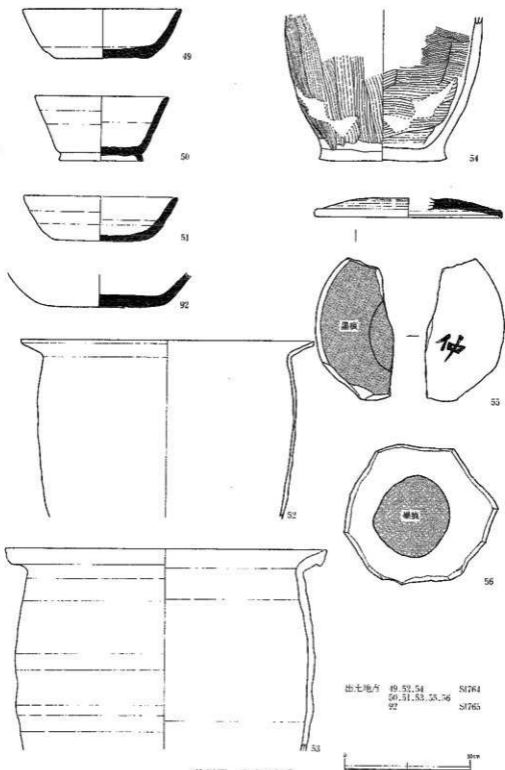
(6) S I 745 (第25図、図版16)

**内黒土師器** 45はロクロ成形の杯である。回転糸切り後、体部下端および底部縁辺部に回転ヘラケズリを施している。

**土師器** 43はロクロ成形の皿である。底部切り離しは回転糸切りで、二次調整は施されていない。内面に漆が付着している。44はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。47はロクロ成形の大形杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。46は鉢である。体部下半にロクロ調整を施している。外面には煤が付着している。48は小形甕である。内・外面にハケ目調整を施している。



第25図 出土遺物⑤

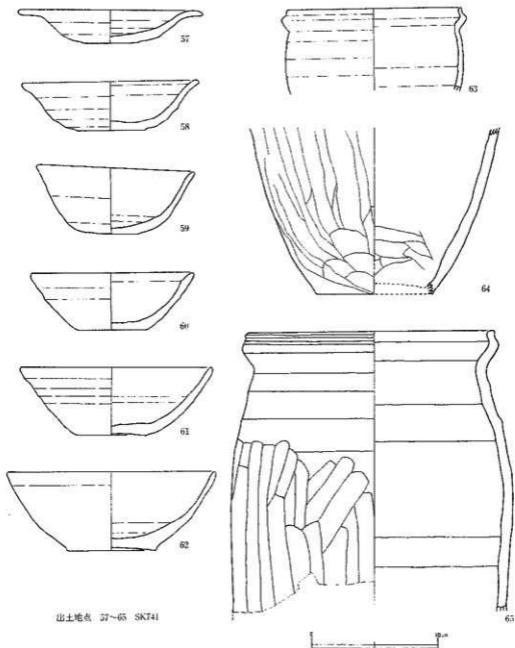


第26図 出土遺物⑤



(7) S I 764 (第26図)

須恵器 49はロクロ成形の杯である。底部切り離しは回転ヘラ切りで、二次調整は施されていない。



出土地点 57~65 SK741

第27図 出土遺物①

**土師器** 52は長胴甕である。体部上半にロクロ調整を施している。54は甕である。内面にハケ目調整、外面にロクロ調整を施している。

(8) S I 765 (第26図、図版16・17)

**須恵器** 50は高台付杯である。底部切り離しは回転ヘラ切りで、二次調整は施されていない。51・92はロクロ成形の杯である。底部切り離しは回転ヘラ切りで、二次調整は施されていない。55はロクロ成形の蓋である。つまみ周辺部には回転ヘラケズリが施されている。内面は碗に転用されており、外面には「仲」の墨書が認められる。53は甕である。内面にハケ目調整、外面にロクロ調整を施している。

2 土壌出土土器 (第27・28、図版16・17)

(1) SK 741 (第27図、図版16・17)

**土師器** 57はロクロ成形の皿である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。58～60はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。61・62はロクロ成形の大形杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。63は小形甕である。全体にロクロ調整を施している。64・65は長胴甕である。体部下半にヘラケズリ→ヘラナデ調整、体部上半にロクロ調整を施している。

(2) SK 748 (第28図、図版17)

**土師器** 69はロクロ成形の杯の破片で、体部外面に墨書が認められるが判読できない。

(3) SK 754 (第28図、図版17)

**土師器** 66はロクロ成形の大形杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。67はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。

(4) SK 762 (第28図、図版16)

**土師器** 68はロクロ成形の大形杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。

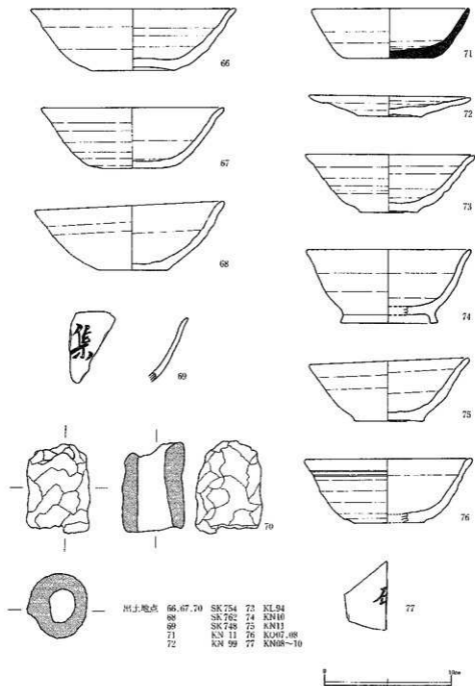
3 その他の遺構出土土器 (第24図)

(1) SX 737 (第24図)

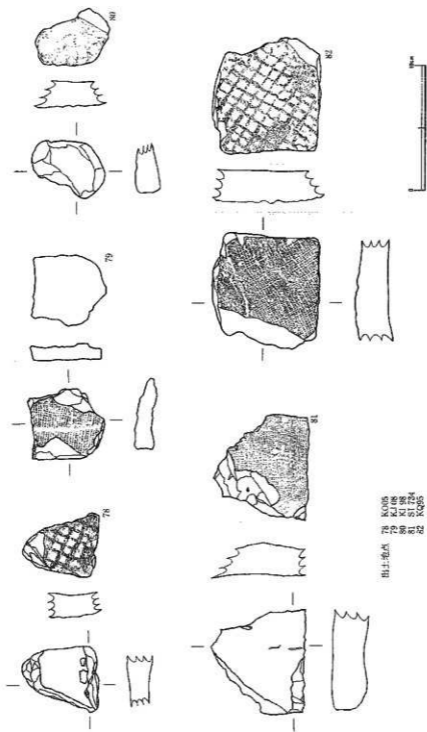
**土師器** 31はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。

4 遺構外出土土器 (第28図、図版17)

**須恵器** 71はロクロ成形の杯である。底部切り離しは回転ヘラ切りである。風化のため調整の有無は不明である。77はロクロ成形の杯である。底部外面に厨と思われる墨書が認められる。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

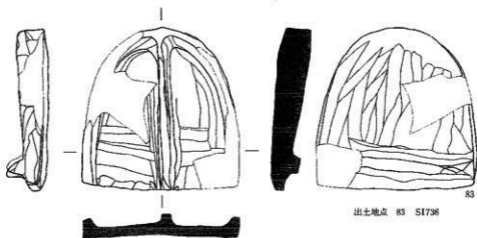


第28図 出土遺物⑧



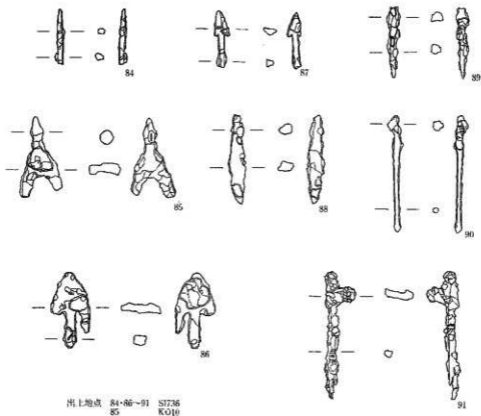
出土片断  
 78 K005  
 79 K108  
 80 S178A  
 81 S178A  
 82 K095

第29回 出土遺物⑧



出土地点 83 SI736

第30図 出土遺物⑨



出土地点 84・86~91 SI736  
85 KO10

第31図 出土遺物⑩

土師器 72はロクロ成形の皿である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。73～76はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。74はロクロ成形の椀である。底部切り離しは回転糸切りである。高台貼付後、ナデ調整を施している。

### 5 その他の出土遺物 (第28～31区、図版17～19)

硯 56はS I 765 から出土した類と思われる底部破片で、硯に転用されている。83はS I 736から出土した陶硯で、中央に隆帯をもつ二面硯である。左側に墨痕跡、右側に墨痕跡と朱墨痕跡が認められる。

瓦 80は硬質の丸瓦である。78・79・81・82は軟質の平瓦である。

フイゴ羽口 70はS K 754 から出土したフイゴ羽口である。

鉄鏝 84～87・89は鉄鏝である。88・90・91は用途不明の鉄製品である。

炭化種子 S I 736 から多量の炭化種子が出土した。現在種子同定を依頼中である。

遺物番号	A口径	B口径	C口径	D口径	E口径	F外縁径	遺物番号	A口径	B口径	C口径	D口径	E口径	F外縁径
1	13.4	6.25	3.5	0.466	26.1	33.5°	36	11.5	5.0	4.8	0.435	41.7	29°-29.5° (29.25°)
4	12.35	4.8	4.55	0.389	36.8	34.5°	37	12.0	4.5	4.2	0.375	35.0	32°
5	12.5	5.1	5.1	0.408	40.8	31°-32° (31.5°)	38	12.45	5.0	3.95	0.402	31.7	31°
6	12.9	5.9	5.85	0.388	45.3	28°	39	11.85	4.2	4.4	0.354	37.1	34°
7	12.5	5.4	4.9	0.432	39.2	28°	40	12.3	5.3	5.15	0.431	41.8	27°-28° (27.5°)
8	13.2	5.1	5.1	0.386	38.6	30°-30.5° (30.25°)	44	13.5	5.4	3.95	0.400	29.2	41°
9	13.2	5.1	4.9	0.386	37.1	32.5°	45	12.8	5.6	5.8	0.437	45.3	25°
13	11.15	5.2	2.15	0.466	19.2	31.5°	47	15.6	5.8	6.35	0.372	40.7	27°
17	14.5	5.2	5.8	0.359	40	34.5°	49	12.7	7.6	3.95	0.598	31.1	22°
18	12.55	5.0	4.9	0.398	39.0	27°	51	12.6		3.6		28.6	
19	13.35	4.9	4.9	0.374	36.7	33.5°	58	13.9	5.4	3.9	0.388	28.0	39°
20	10.8	5.2	4.4	0.481	40.7	31.5°	59	12.5	4.4	5.35	0.352	42.8	23°-26° (24.5°)
21	11.8	5.6	4.9	0.475	41.5	19°	60	12.85	5.5	4.6	0.428	35.7	33°
22	14.6	6.6	6.3	0.452	43.2	21°	61	15.2	5.6	5.4	0.368	35.5	31.5°-33° (32.25°)
23	13.7	5.2	4.4	0.380	32.1	34°	62	16.45	7.0	6.3	0.426	38.2	29.5°
24	13.2	4.8	4.8	0.364	36.3	33.5°	66	16.3	6.7	4.95	0.411	30.3	34°
25	11.6	5.0	5.15	0.431	44.3	27.5°	67	14.5	4.8	4.9	0.331	33.7	34°
29	13.55	5.5	5.0	0.406	36.9	33°	68	15.0	5.5	5.15	0.367	34.3	31.75°
31	13.6	5.6	4.0	0.412	29.4	41.5°	71	12.3	7.2	3.9	0.585	31.7	27°
33	13.0	5.4	5.2	0.397	38.2	33.5°	73	13.4	4.7	4.6	0.351	34.3	38°
34	13.3	5.1	4.75	0.383	35.7	32.5°	75	12.5	5.6	4.8	0.448	38.4	30.75°
35	13.7	5.3	4.75	0.387	34.6	30°-34° (32°)	76	14.1	5.6	5.1	0.397	36.1	26.5°

第3表 出土遺物流量一覧

## 第4節 小 結

本調査区は政庁北側に接する長森丘陵北斜面および丘陵裾部にあたり、遺構は僅少であろうというのが調査前の見通しであった。結果としては竪穴住居跡9軒と区画施設と思われる溝状遺構など新しい知見を得ることができたので、成果と課題をまとめておきたい。

1 竪穴住居跡については、その規模・主軸の方向・火山灰の有無および出土土器の相対的位置などから、5期に分け実年代の推定をおこなった。

A期 S I 765・(S I 764)

政庁第I期直前とした遺構(S I 331・S I 332・S I 571)に対応する竪穴住居跡である。出土土器は8世紀末・9世紀初頭と思われる。

B期 S I 734・S I 745

主軸が西偏する竪穴住居跡である。出土土器は9世紀末・10世紀初頭と思われる。

C期 S I 731・S I 735

面積が5～7㎡と小形の竪穴住居跡である。出土土器は10世紀前葉と思われる。

D期 S I 736

C期(S I 735)と切り合い関係にある竪穴住居跡である。出土土器は10世紀前半と思われる。

E期 S I 738

最も新しい時期の竪穴住居跡である。出土土器は10世紀後半以降と思われる。

竪穴住居跡は大きく5期の変遷を認めた。B期～E期の出土土器は、ロクロを用いた土師器杯が主体である。この土器は編年基準が定まっていないので、年代については今後の検討を要しよう。

上記の竪穴住居跡はどのような人が、どのような時につくり、使用されたのであろうか。これら竪穴住居跡群のなかで、S I 736について再度見ておきたい。S I 736は①例えばS I 734・S I 765とともに政庁南・北門をむすぶ中軸線の延長上に位置すること②S I 765とともに住居跡の各辺がおよそ南北方向に沿っていること③住居跡の覆土は大きく3層に分かれ、第三層は床全体が炭化物層であり、木製品・土師器(杯)・須恵器(長頸壺・小壺・皿・高台皿・大甕)・陶硯・鉄製品(鉄鏃)など質量とともに豊富な遺物がみられた。言い換えれば、食料・食器・文具・武具が揃っている状態を復原できる。おそらくS I 736は火災焼失したものであろう。以上のような観察から集落跡の竪穴住居跡とS I 736は本質的に異なる性格をもつものと思われる。

2 長森丘陵裾部の地形に沿って、東西に走る溝状遺構(S D 767・778・774)を検出した。

溝状遺構は平面と土層観察から、板塀もしくは柵列のような区画施設だったと思われる。またSD 767とSD 778は連続していたものと思われるが、SD 774とは12.3mの距離があり、開口部と考えてよいであろう。SD 767・774の出現時期は火山灰を含むSK 773を切っているため、比較的新しい遺構と予測できるが特定できない。おそらく溝状遺構はSI 738平行か、それ以降につくられたとしても大過ないと思われるが、既述のとおり根拠をもたない。SD 767とSD 774との開口部の位置は、政庁南・北門をむすぶ中軸線の延長上に位置する。この事実は、開口部が政庁北門を意識してつくっているということであり、政庁が実在していた時期に造られた施設であろう。

今次の調査では、新しい区画施設と考えられる溝状遺構の一端が確認され、内郭線と政庁との間にもう一つの区画施設を検出したわけであり、この溝状遺構を弘田柵跡全体の変遷のなかに位置づけるためには、今後の追跡調査によって政庁・竪穴住居跡との関係、出現時期の特定など多くの課題を考究していかなばならない。



## 第4章 第61次調査

### 第1節 調査経過 (第32図、図版20)

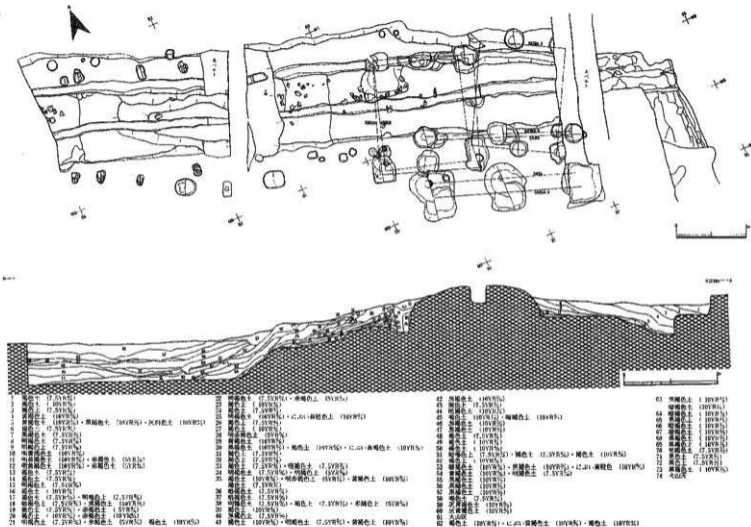
第61次調査は長森丘陵の北東裾部で、内郭東門の存在が想定された位置にあたる推定内郭東門の検出とその構造、内郭線と内郭東門の接点部分の構造解明、築地土堀の構築方法の解明と既調査区の構築方法の対比、内郭線内・外における諸施設の有無の確認を目的として実施した。



第32図 第61次調査地形図

調査は、当初調査対象地域として予定していた仙北町弘田字百目木81～83番地の土地所有者の承諾が得られなかったため、これを除いた仙北町弘田字長森23～4番地内の約500㎡を対象とした。8月27日～30日の間に基準点移動、遺方設定、器材搬入等を行い、9月2日より表土剥ぎを開始した。4・5日には第22回顧問会議を秋田県埋蔵文化財センターで行い、顧問新野直吉秋田大学教授、岡田茂弘国立歴史民俗博物館教授には直接現地にて御指導をいただいた。27日築地の曲折部分を検出し、プラン確認図を作成する。調査区東側の水田中に内郭線曲折部を想定していただけに内郭東門の位置推定など再考しなければならない問題は多い。30日調査区東部においてS D 783・784・S X 781・782の4遺構を検出した。S D 783・784は覆土中に火山灰を含んでいる。10月7日築地北側の精査を開始する。NA 01～03・NB 01～03グリット内において火山灰と共存ないし火山灰層の下から遺物が一括出土した。9日からS B 79・80・S A 78・84～86の精査に着手したが、断続的な降雨のため作業は難行した。14日顧問新野直吉秋田大学教授が来跡された。調査区東部のS D 783・784・S X 781・782の最終平面図を作成する。18日S B 79・80は東西棟2×1間の掘立柱建物跡で新旧2時期あることが判明した。19日S A 84・85は平・断面において各々1時期の計2時期を確認したが、掘形の形状などからさらに1時期の追加が考えられる。S A 86は東西2間の柱列である。24日S K 786・787の精査を行う。29日精査の終了した遺構の写真撮影を開始する。30日最終平面図作成し、全体の最終写真撮影に入る。11月1日～5日間に最終写真撮影および補足調査を実施した。6日～19日までに人手による埋戻し作業を行い、20日に器材等を撤収して調査を終了した。





第34図 S F 75実測図・Bベルト東壁土層図

## 第2節 検出遺構 (第33～37図、図版21～33)

本調査においては、16遺構を検出した。内訳は築地土塀1・掘立柱建物2棟・柱列5列・溝状遺構4条・土塀2基・その他2の計16遺構である。以下、主要遺構の概要を記述する。

### 1 築地土塀 (第34図、図版22・23)

全長22.8m、幅4.1～4.8mを確認した。

### 2 掘立柱建物跡 (第35図、図版26～28)

#### (1) SB79A (第35図、図版26・28)

東西棟桁行2間×梁行1間の掘立柱建物跡である。柱掘形は方形ないし不整形を呈すると思われるが、SB79B柱掘形に切られているため、その一部を確認したのみである。建物規模はSB79Bと同規模で、計画尺による桁行12尺、梁行15尺と思われる。SB79A-3柱掘形はSB80-1柱掘形に切られている。

#### (2) SB79B (第35図、図版26・28)

東西棟桁行2間×梁行1間の掘立柱建物跡である。総間は桁行3.79m、梁行4.65mで、計画尺による桁行12尺(6尺等間)、梁行15尺であろう。一尺は30.1cmである。柱掘形は不整形を呈し、直径26～28cmの柱痕が認められる。柱掘形の深さは4～18cmで、埋土は褐色土である。

#### (3) SB80A (第35図、図版27)

東西棟桁行2間×梁行1間の掘立柱建物跡である。総間は梁行4.93mで、計画尺による桁行14尺(7尺等間)、梁行16尺と思われる。一尺は30.8cmである。柱掘形は不整形を呈すると思われるが、SB80B柱掘形に切られているためその一部を確認したのみである。SB80B-3・6柱掘形において直径38～40cmの柱痕が認められる。柱掘形の深さ26～30cmで、埋土は明褐色土である。SB79A-3柱掘形をSB80A-1柱掘形が切っている。またSD76をSB80A-1～3柱掘形が切っている。またSD76をSB80A-1～3柱掘形が切っている。

#### (4) SB80B (第35図、図版27)

東西棟桁行2間×梁行1間の掘立柱建物跡である。総間は桁行3.93mで、計画尺による桁行12尺ないし14尺(6尺等間ないし7尺等間)、梁行15尺と思われる。一尺は30.2cmである。柱掘形は不整形ないし楕円形を呈し、直径26～30cmの柱痕が認められる。柱掘形の深さは6～14cmで、埋土は褐色土である。

### 3 柱列 (第35図、図版26～29)

#### (1) SA78A (第35図、図版26・27)

SF75の南側に位置する東西筋2間の柱列である。柱掘形は不整形を呈すると思われるが、SA78Bに切られているためその一部を確認したのみである。計画尺はSB78Bと同じ21尺(



10尺等間)と思われる。

(2) **S A 78 B** (第35図、図版26・27)

S F 75の南側に位置する東西筋2間の柱列である。総間で6.31m、計画尺による21尺(10.5尺等間)であろう。一尺は30.1cmである。柱掘形は不整形円形を呈し、直径29~31cmの柱痕が認められる。柱掘形の深さは15~56cmで、埋土は褐色土を主とする。

(3) **S A 84** (第35図、図版26・28)

S A 78・86の南に位置する東西筋2間の柱列である。柱間はS A 84 - 2・3柱痕間が3.16mで、計画尺による21尺(10.5尺等間)と思われる。柱掘形は不整形円形を呈し、直径約31cmの柱が遺存している。柱掘形の深さは34~72cmで、埋土は明褐色土を主とする。S A 84はS A 85を切っている。

(4) **S A 85 A** (第35図、図版26・28)

S A 84の南に位置する東西筋2間の柱列である。柱掘形は不整形方形を呈すると思われるが、S A 84・85 Bに切られているためその一部を確認したのみである。計画尺はS A 84・85 Bと同じ21尺(10.5尺等間)と思われる。

(5) **S A 85 B** (第35図、図版26・28)

S A 84の南に位置する東西筋2間の柱列である。柱掘形は不整形方形を呈すると思われるが、S A 84に切られているためその一部を確認したのみである。計画尺はS A 84・85 Aと同じ21尺(10.5尺等間)と思われる。

(6) **S A 785** (第34図、図版29)

S F 75の両側に位置する東西筋の柱列である。北側柱列は長さ6mで、柱掘形1とビット6を確認した。南側柱列は長さ16.75mで、柱掘形4・ビット9を確認した。南側柱列の柱掘形はすべて2時期を確認した。古い柱掘形埋土は汚れが少なく、地ならし直後の仕事と思われる。柱掘形は不整形円形ないし楕円形で、埋土は黒褐色土を主とするものと黄褐色土を主とするものがある。しかし、柱掘形・ビットの配列および埋土の状態などに規則性は認められない。

4 溝状遺構 (第34~36図、図版23・24・30・32)

(1) **S D 76** (第34・35図、図版23・24・30)

築地の北際に東西に走る溝状遺構である。全長34.1m、幅35~61cm、深さ3~76cmである。S D 77と並行して走り、S X 781の手前約3.2mで、南へ曲がっている。S B 80 A・Bに切られている。

(2) **S D 77** (第34・35図、図版23・24・30)

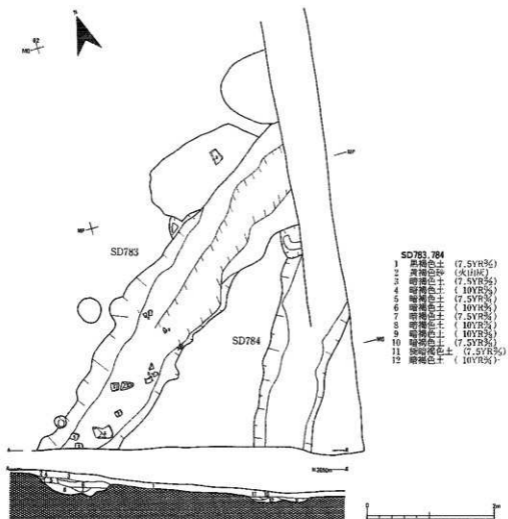
築地本体のほぼ中央を東西に走る溝状遺構である。全長30.3m、幅21~69cm、深さ4~75cmである。S D 76と並行して走り、S X 781の手前約3.2mで、南へ曲がっている。

(3) SD 783 (第36図、図版32)

S X 782 の東に位置する溝状遺構である。全長6.53m、幅0.98~1.37m、深さ35cmである。覆土中に火山灰を含む。SD 784 と接しているが、新旧関係は不明である。

(4) SD 784 (第36図、図版32)

SD 783 の東に位置する溝状遺構である。全長3.12m、幅0.93~1.2m、深さ19cmである。覆土中に火山灰を含む。SD 783 と接しているが、新旧関係は不明である。



第36図 SD実測図

## 5 土坑 (第37図、図版31)

## (1) SK 786 (第37図、図版31)

SB80の北に位置し、不整形円形を呈する遺構で、東西78cm、南北1m、深さ43cmである。覆土中に角礫が密に入っている。

## (2) SK 787 (第37図)

SB79の北東に位置し、不整形円形を呈すると思われる遺構で、現状で東西1.9m、南北1.45m、深さ28cmである。

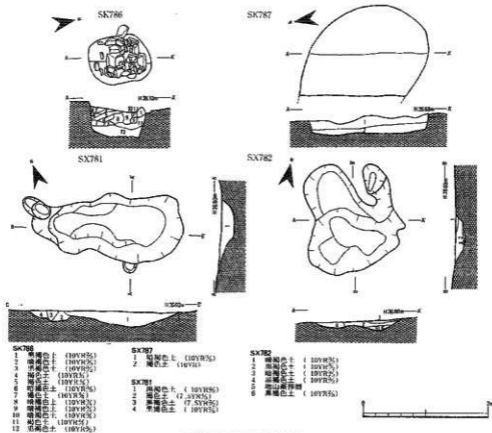
## 6 その他の遺構 (第37図、図版32)

## (1) SX 781 (第37図、図版32)

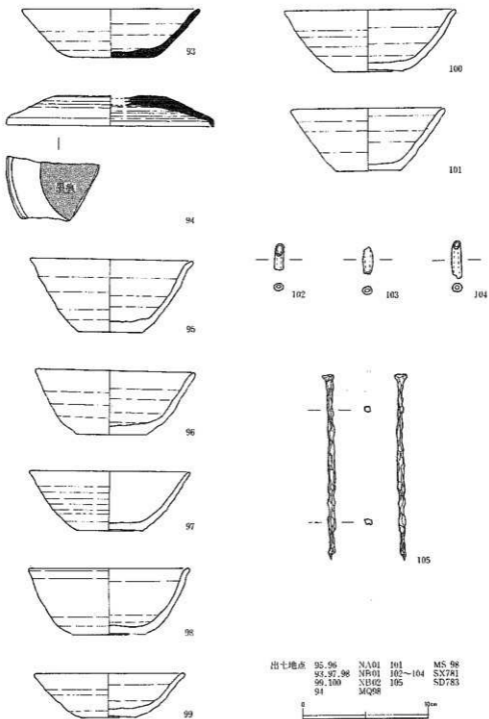
SX 782の西に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸2.56m、短軸0.74~1.18m、深さ23cmである。覆土中より土錐が3点出土している。

## (2) SX 782 (第37図、図版32)

SD 783の西に位置し、不整形を呈する遺構で、長軸1.76m、短軸1.47m、深さ15cmである。







第38図 出土遺物①

## 第3節 出土遺物 (第38・39回、岡阪34)

**須恵器** 93はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。94はロクロ成形の蓋である。つまみ周辺部に回転ヘラケズリが施されている。内面は碗に転用されている。

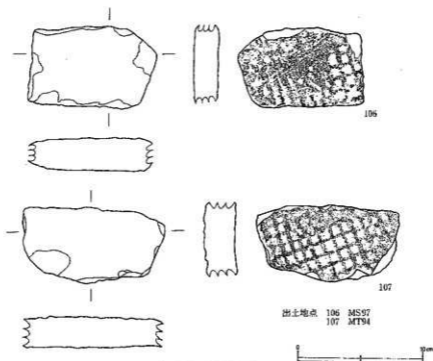
**土師器** 95～101はロクロ成形の杯である。底部切り離しは右回転糸切りで、二次調整は施されていない。97は内面に煤が付着している。

**瓦** 106・107は軟質の平瓦である。

**その他の遺物** 102～104はS X 781から出土した土錘である。長さ2.2～3cm、幅7～8mmで、径2～3mmの穴が貫通している。105は用途不明の鉄製品である。

遺物番号	A口径	B底径	C器高	D厚	$E \frac{C}{A} \times 100$	F外傾度	遺物番号	A口径	B底径	C器高	D厚	$E \frac{C}{A} \times 100$	F外傾度
93	14.0	6.3	3.9	0.45	27.8	39°	96	12.6	5.8	5.3	0.460	42.0	22°
95	13.0	5.1	5.8	0.392	44.6	29°	99	11.9	4.4	3.5	0.370	29.4	40°
96	12.6	5.6	5.1	0.444	40.4	27°	100	13.6	5.7	4.9	0.419	36.0	32°
97	12.7	5.3	4.75	0.47	37.4	30.5°	101	12.1	5.2	5.0	0.429	41.3	32°

第4表 出土遺物法量一覧



第39回 出土遺物②

## 第4節 小 結

本調査は第9次発掘調査の東端から、さらに東側の範囲を対象とすることによって、内郭線に附設されている推定内郭東門を検出することを目的としたが、調査地区内では確認することができなかった。以下、主要な成果をまとめてみたい。

1 内郭線は昭和5年の段階で内柵門と呼ばれていた北門が知られ、当事務所の第13次発掘調査において南門を検出し、南・北二門の存在が確定していた。この内郭南門が見つかったから、内郭線に東門・西門が附設されている可能性が大きいと判断し、現状変更などに伴う調査などにおいても、かなり細かい記録を積み上げてきた。この結果からすれば、推定内郭東門は本調査区内に特定できるのではないかと考えていた。つまり、内郭線は第9次発掘調査で検出したS F75築地土塀から東進し、北進する第3次A発掘調査で検出したS F01築地土塀とほぼ直角に連続し、この範囲内に東門が存在するであろうと予想していた。

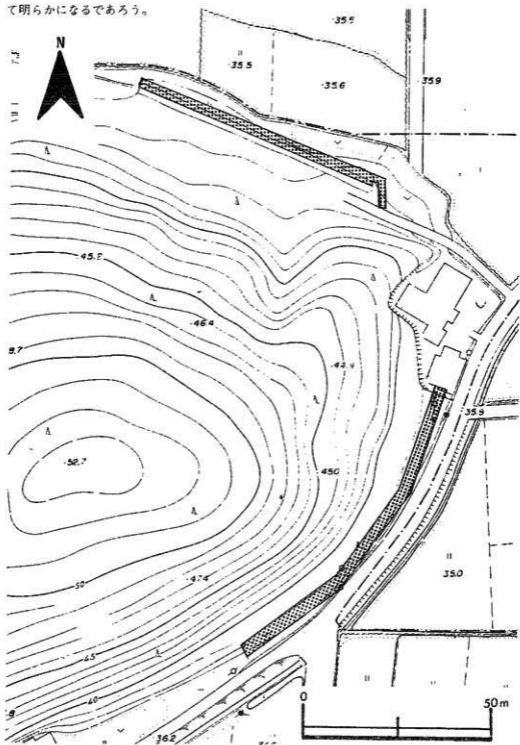
S F75の東端は現在畑地であり、築地版築土は見つからず、築地の中央に設けられたS D77と築地の北際を走るS D76の溝底部がわずかに痕跡を残しており、2条の溝が南方向に約110°曲がっていた。現在S D77は内郭線第Ⅱ期の仕事と位置づけており、創建当初のS F75も、南方向に曲がっていたと復原しても間違いのないであろう。

現況の自然地形に内郭線の位置を入れてみたのが第40図である。本図からみれば、既述したS F01とS F75・S D77が直線でつながることは、その屈曲する角度からみて不可能である。したがって、推定内郭東門をむすぶ内郭線は、内郭北門と内郭南門が内郭線と「八」の字型に連続していると同様な関係にあったのではないかと想像させる結果となった。おそらく、内郭線はS F75・S D77の屈曲部から南方向に築地土塀が走って内郭東門の北西隅柱と接し、北東隅柱に接する築地土塀が南東方向に走ってS F01と連続するのではないかと考えられる。このように今回の調査では推定内郭東門をつきとめえなかったが、その位置をさらに限定する手がかりを得たことになる。

2 第9次発掘調査では部分的にしか把握できなかったS F75の南北両側に東西筋のSA785柱列を認めることができた。SA785の南側柱列の柱塀形は2時期を確認したが、北側では明確でない。また柱間の距離、南北柱位置の対応など配列位置の規則性を読みとることができなかった。このような観察からSA785の果たした役割については、当初築地土塀構築における樞軸などを支えた柱列と解していたが、果たしてこのような理解が妥当か否かを含めて、あらためて築地土塀の構築方法とその技術の復原を考究してゆきたい。

3 調査区の東端では、S D783・S D784の溝を検出した。この2条の溝は覆土中に火山灰を含むことから、古代の遺構であることがわかった。溝のつくられた時期・役割など不明だ

が、走る方向は推定内郭東門の方向を暗示しているようである。いずれ今後の発掘調査によって明らかになるであろう。



第40図 内郭線位置図

## 第5章 第62次調査

### 第1節 調査経過 (第41図)

第62次調査は第3次5年計画の基本計画の一環として実施した遺構確認調査である。本調査は弘田権跡内の調査・研究に資する基礎資料の作成を目的として、外郭南東部の水田・畑地など約100,000㎡(約10町歩)を対象に実施した。

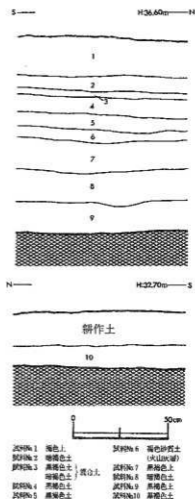
調査は対象地区に設定した約324㎡(10間四方)の方眼を基準としてハンド・ボーリングにより地山レベルを把握するとともに、同地域で表面採集をも実施し、遺物の分布および密度を調べ、遺構の存在および範囲を推定する方法をとった。さらに古代における土地利用の実態を把握し、古環境の復原をはかる基礎資料とするために花粉分析を実施することになり、長森丘陵北麓に位置するホイド井泉跡および本調査対象地域内水田から10点の試料を採取し、パリオ・サーヴェイ株式会社へ分析を委託した。

### 第2節 調査成果 (第40・41・43～45図、図版35)

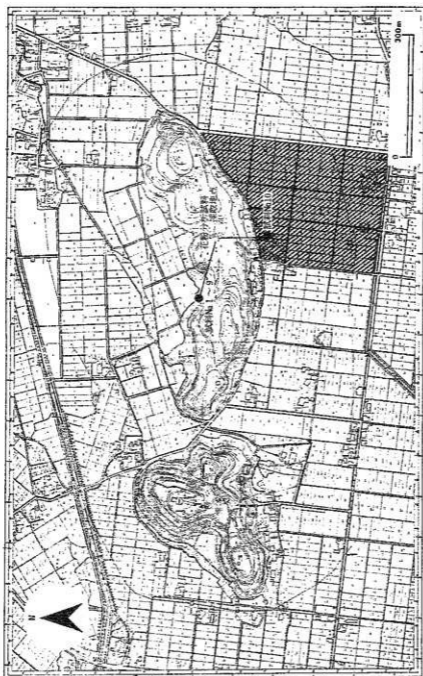
#### 1 ハンド・ボーリングおよび表採結果

ハンド・ボーリング調査の結果、推定される地山レベルは第42図に示すとおりである。全体が東から西へ傾斜しており、調査区が千屋層状地の露端部に接しているのが理解できる。現段階では部分的に地山の凹凸が認められるが、遺構との関わりは不明である。しかし、今回の調査によって調査区内の地山地形の特徴は把握できたといえよう。

次いで、表採の結果を第45・46図に遺物の分布図として示した。大きく4グループに分けられるが、区画施設である外郭線を意識させる分布状況にはならないことが注目される。また先に示した地山のレベルと分布密度と



第41図 花粉分析試料採取地点土層図



第42図 第62次調査地形図

の間に密接なつながりを今回の調査では見出せなかった。

## 2 花粉分析の結果

花粉分析により古代における植生の一部を知り得ることができた。なお花粉分析結果の詳細については第8章を参照されたい。

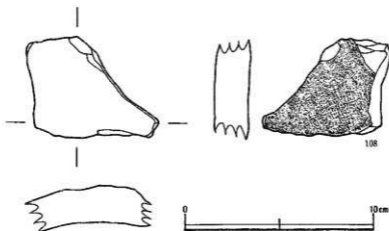
### 第3節 出土遺物 (第42図)

本調査の出土遺物は丸瓦1片・土師器片10数片である。108は丸瓦で、凸面はナデ調整によって叩き目が消されており、凹面は布目の軟質瓦である。この他、表面採集資料として須恵器・土師器片が多数あるが、図示できるものはない。

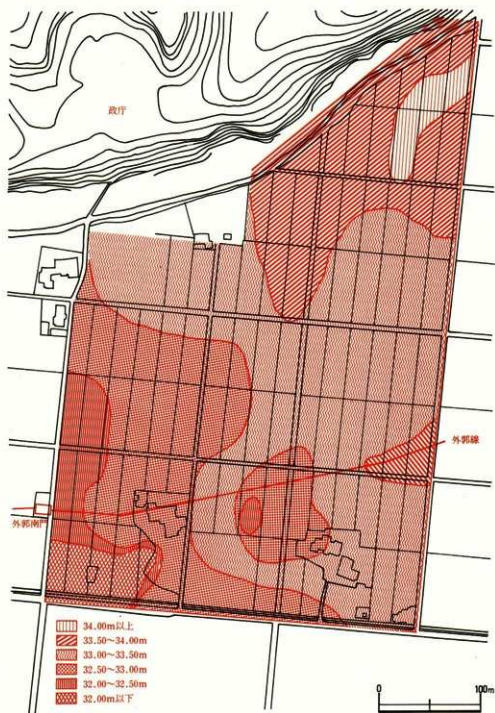
### 第4節 小結

本調査で実施したハンド・ボーリング調査によって地山レベルの把握を可能としたことは、今後その対象範囲を拡げるにより遺跡全体の地山地形の様相を把握できる見通しを得たといつてよいだろう。今回の調査では地山レベルと遺物の分布の間には何らつながりを見出せなかったが、遺構の存在の有無をも併せてさらに調査の方法を検討する必要がある。加えて外郭線の内・外に遺物の分布がまたがる場合もあり、区画施設としての外郭線のあり方をも再考する必要があるであろう。

花粉分析の結果からは、古代における植生の一部を知り得たに過ぎず、土地利用の実態・古環境の復原をはかるには今後の資料の蓄積が必要である。

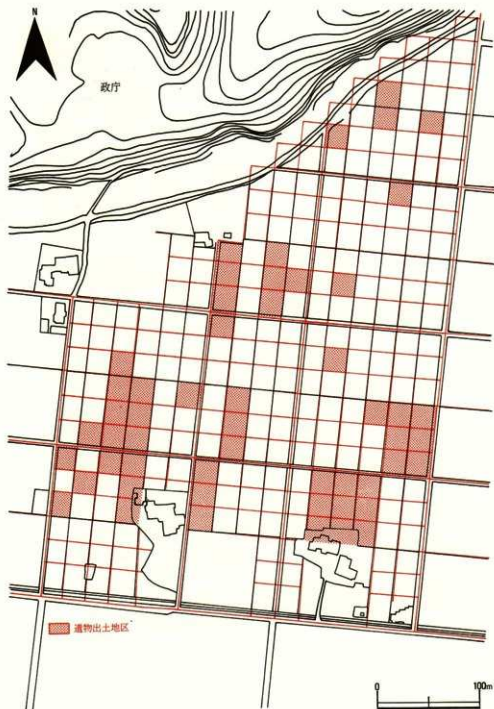


第43図 出土遺物

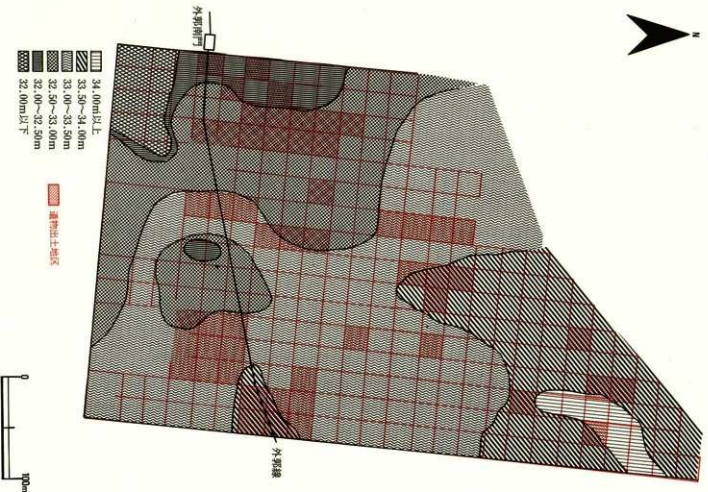


第44図 地山地形復原図





第45図 遺物分布図(1)



第46圖 遺物分布圖2)

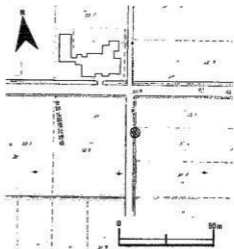
## 第6章 第63次調査

### 第1節 調査経過 (第46図、図版36)

管理団体である仙北町あてに、昭和59年7月26日付で仙北郡高梨土地改良区理事長 大野清栄氏より館前地区県単かんばい事業を理由とした現状変更許可申請書が提出された。申請書は秋田県教育委員会を経由して、昭和59年9月4日付秋教文取第368号にて文化庁へ進達された。

これに対し、文化庁から申請者あてに昭和59年10月2日付委保第4の775号をもって「1 工事予定地のうち、弘田柁跡外郭線推定地に係る工事の着手は、秋田県教育委員会による発掘調査の終了後とすること。2 工事予定地のうち、1以外の地域に係る工事に際しては、秋田県教育委員会及び仙北町教育委員会職員の立会いを求めること。3 その他、実施に当たっては、秋田県教育委員会の指示を受けること。」との通知があった。

当事務所では「第63次調査」として、外郭線推定位置部分を中心として1m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。



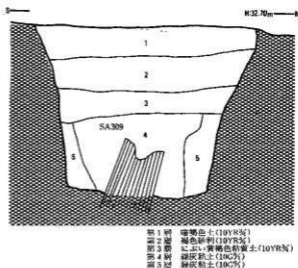
第47図 第63次調査地形図

### 第2節 検出遺構 (第48図)

#### SA 309 (第47図、図版36)

水路中にて角材4本を検出し、水路東・西壁において角材列の布堀り掘形を確認した。角材は上面幅約68cmの掘形プランのほぼ中央に密接して東西に並置されており、上部は腐朽が著しい。

掘形プラン及び検出角材の出土状態から判断してSA 309は単一時期である。



第48図 SA309土層図

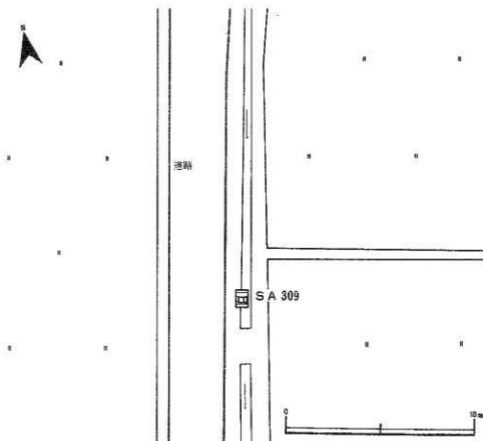
### 第3節 出土遺物

角材4本を検出したのみである。

### 第4節 小 結

今回の調査においては外郭線角材列の位置を確認するとともに、従来の見解どおり角材列に重複がないことを再確認した。

外郭線角材列の掘形プランレベルおよび角材の上部レベルは、いずれも本事業のU字溝埋設に伴う掘削レベルより下位のため、本現状変更による史跡への直接の影響はないと判断される。



第49図 第63次調査実測図

## 第7章 第64次調査

### 第1節 調査経過 (第49回)

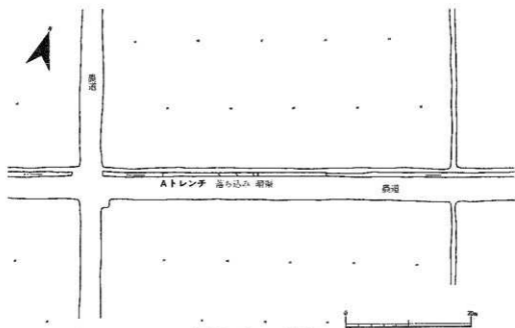
管理団体である仙北町あてに、昭和59年8月21日付千土改発第183号で仙北郡千畑村土地改良区理事長 後藤 正氏より土地改良総合整備事業(農道および用排水路の拡幅整備)を理由とした現状変更許可申請書が提出された。申請書は秋田県教育委員会を經由して、昭和59年8月28日付秋教文収第366号にて文化庁に送達された。

これに対し、文化庁から申請者あてに、昭和59年10月12日付委保第4の772号をもって、「1 工事予定地のうち、弘田橋跡の内郭線・外郭線推定地に係る工事の着手は、秋田県教育委員会による発掘調査の終了後とすること。2 工事予定地のうち、1以外の地域に係る工事に際しては、秋田県教育委員会および仙北町教育委員会職員の立会いを求めること。3 その他、実施に当たっては、秋田県教育委員会の指示を受けること。」との通知があった。

当事務所では、事業区内の本年度着手部分を「第64次調査」として、Aトレンチ・Bトレンチ併せて23㎡の発掘調査を実施した。



第50図 第64次調査地形図



第51図 Aトレンチ実測図



第52図 Bトレンチ実測図

## 第2節 検出遺構 (第50~52図、図版37)

### Aトレンチ (第50・52図、図版37)

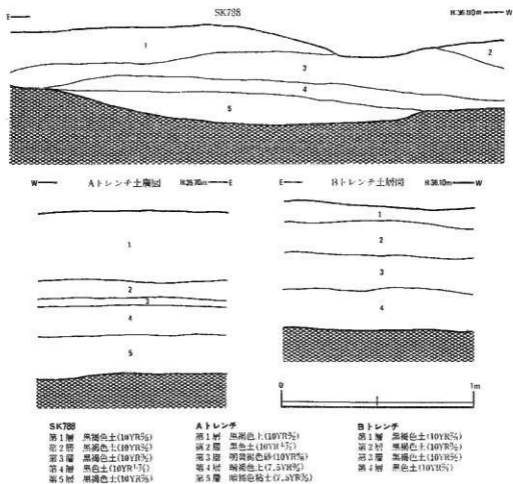
想定内部線を中心に東西約26m、幅60cmのトレンチを設定した。第52図によれば古代の生活面は第3層~第4層ないし地山面と思われるが、遺構は検出されなかった。

### Bトレンチ (第51・52図、図版37)

長森丘陵北側の新規用排水路計画部分に東西約18.5m、幅40cmのトレンチを設定し、土城1基を検出した。

### SK788 (第52図)

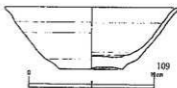
Bトレンチ西端に位置し、楕円形を呈すると思われる遺構である。南半は調査区外に拡がっ



第53図 第64次調査土層図

しており、現状で東西2.07m、南北39cm、深さ16cmである。

### 第3節 出土遺物 (第53図)



第54図 出土遺物

Aトレンチからの出土は皆無である。Bトレンチ内からは土師器・須恵器片が数10点出土している。SK 788内からは土師器片が約10点出土しており、第54図はロクロ成形右回転糸切り無調整の土師器杯である。法量は口径13.6cm、底径5cm、器高5cm、底径指数0.368、高径指数36.3、外傾度35.5°である。

### 第4節 小 結

内郭線角材列の位置確認調査は昭和57年度に第51次発掘調査として実施しており、今回Aトレンチを設定した用排水路は51-2地区にあたる。前回の調査において当地区は土地所有者より発掘承諾が得られなかったためボーリング探査による確認のみなされた場所であり、その確認地点も3地点のみと少なく、内郭線の位置把握が現状で最も不明瞭な地区である。これらの事情により本調査には期するところが大きであったが、用排水路内という限定条件下のため内郭線の位置確認はできなかった。

Bトレンチ設定区域については、長森丘陵裾の平坦地であること、多量の土器・木簡が出土したホイド井泉跡(第49次発掘調査)から西へ100mと近接した場所であることなどから何らかの遺構が存在する可能性が高いと推察された。結果としては土壌を1基検出したにとどまったが、遺物の出土量や地形等から周囲に他の遺構の存在を十分に窺い知ることができ、今後の当地域の調査の足掛りとなり得るものである。



## 第8章 花粉分析

弘田柵跡の時代（8世紀末～11世紀初頭）における稲作の存在の確認と当時の植物環境を明らかにするとともに、古代における土地利用の実態を把握する糸口をつかむため、花粉分析を行い、資料の集積をはかることにした。今回の花粉分析試料採取地点は第56図、採取層位については第55図に示すとおりである。なお、分析はバリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。以下、提出のあった「弘田柵跡試料花粉分析報告」の概要である。

### 弘田柵跡調査試料花粉分析報告

#### 1 試料

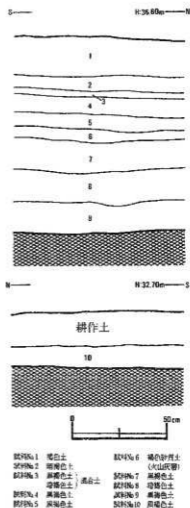
試料は、「弘田柵跡」のホイド井泉跡西壁土層から9点、東壁土層から1点の計10点である。試料採取層位及び岩質を図1に示す。

#### 2 化石の抽出

花粉・胞子化石の抽出は、試料15g（湿重、砂は30g）を秤量し、48%HF-重液分離（ZnBr<sub>2</sub>比重2.15）-アセトリス処理-10%KOHの順に物理・化学的処理を行なった。砂層については、前記処理前に傾斜法により粗粒物質を除去した。植物片の多い試料は重液分離後、篩別（25μm）した。処理後の残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

#### 3 分析結果及び考察

計数においては、プレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての分類群及びその個数を表1に示した。また、樹木花粉が100個以上出現する試料については、花粉ダイアグラムとして示した（図1）。基数は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本・胞子は全花粉・胞子を基数として百分率を作出した。図表中複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。



第55図 花粉分析試料採取地点土層図



图 56 花粉分析材料採取地地図

ホイド井泉跡西壁土層試料 (No1~9)

9層から1層を花粉の出現傾向から2つの花粉帯に区分した。9層をA帯、8~6層をB帯、5~1層は花粉の産出が少ないので花粉帯としない。

○A帯

樹木花粉が70%と高率に出現する。

樹木花粉では、ハンノキ属、コナラ亜属が高率に出現し、トチノキ属、スギ属を伴う。草本花粉は少なく、イネ科、ヨモギ属が低率に出現する。

○B帯

樹木花粉は上層にかけて減少、草本花粉は増加する。

樹木花粉ではスギ属が増加し、優占する。コナラ亜属、トチノキ属は減少する。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が増加の傾向を示す。6層ではイネ科が28%の出現率を示す。その内96%が野生型のイネ科であった。

上述した花粉の出現傾向から植生変遷を考察する。A帯では、コナラ亜属等の落葉広葉樹が周辺の丘陵地に発達しており、トチノキ、スギ等が河川の上流や台地上の常に水が供給されている所に生育していた。低湿な所にはハンノキなどが生育していたと考えられる。B帯では、A帯で発達していたコナラ亜属等の落葉樹が減少し、スギ属が増加する。原因として、人為的なコナラ亜属類の伐採とスギの植林、気候の湿潤化によるスギの進出などが考えられる。川村(1979)は、表層試料の分析結果でスギ属の花粉がスギ林のほぼ2km間で約20%以上出現するとしている。B帯ではスギ属が30%以上の出現を示すことから、かなり近くにスギが存在したであろう。しかし、草本花粉が高率に出現することから疎林であったとも思われる。6層で、栽培型のイネ科がほとんど出現していないことから、B帯では稲作は行なわれていなかったと考えられる。

秋田県における花粉分析は、低地では本荘、能代平野(辻, 1981)、山地では八幡平西方の玉川温泉(辻, 1977)などで行なわれている。それらの結果は、ブナ属、ナラ属が上限約2700~2000 Y・B・P・まで優占しその後スギ属、ブナ属、ナラ属に遷移し、上限1000 Y・B・P・まで発達している。今回の試料で、9層が8世紀後半の堆積物である。このことから、この地域では、スギ属の増加が他地域より遅れて始まったと考えられる。全体的な花粉出現傾向は、ブナ属が低率に出現すること以外は類似している。

東壁土層2層 (No10)

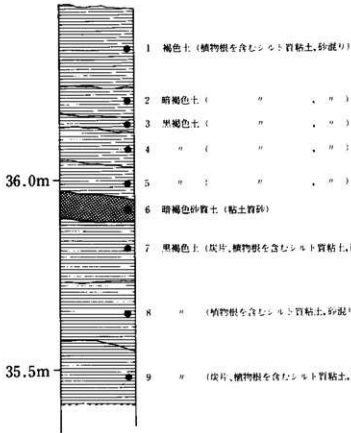
草本花粉が76%以上の出現を示す。樹木花粉ではスギ属が33%の出現率を示し、コナラ亜属、ブナ属を伴う。草本花粉では、イネ科が51%と高率に出現する。その内54%が栽培型のイネ

科である。鈴木・中村（1979）によれば集約的な栽培の行なわれている水田土壌ではイネ科全花粉中で稲型花粉が少なくとも30%以上の頻度を示すとしている。このことと、水田植物であるコナギ属、オモダカ属、サンショウモなどが存在することから、この地点で稲作が行なわれていたと考えてはば間違いないと思われる。しかし1層（現水田土壌）の層厚が約17cmであることと、水田土壌では花粉は表層から15～25cm下層まで垂直移動するという基礎的研究結果（鈴木・中村、1977）から、試料No.10の2層は上位の1層の攪乱を受けている可能性もあるので断定はできない。今後は、ホイド井泉跡西壁5層より上層の植生変遷や、東壁1層の花粉組成などを明らかにしていくことが必要と思われる。

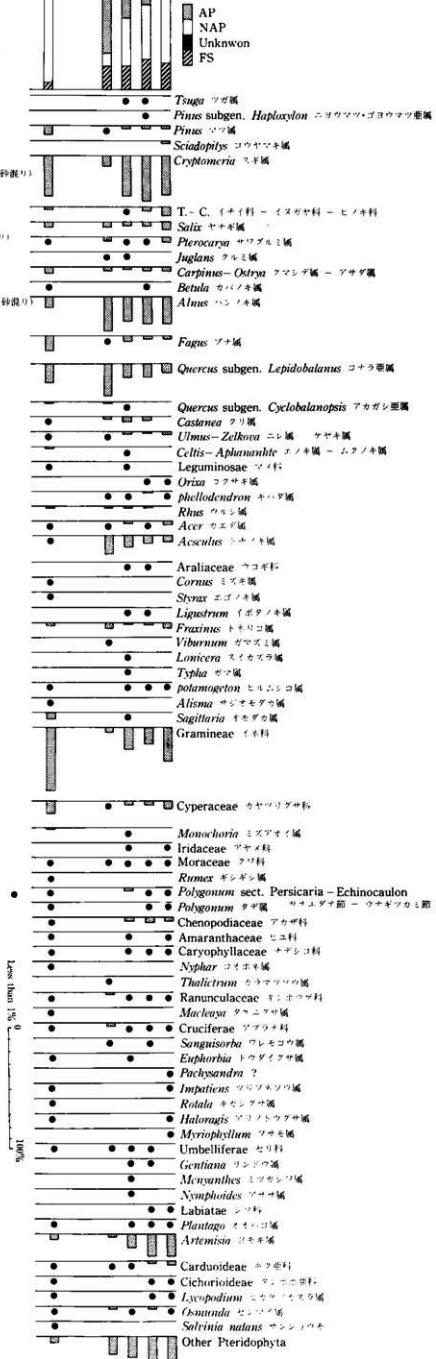
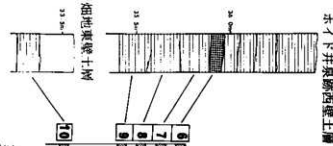
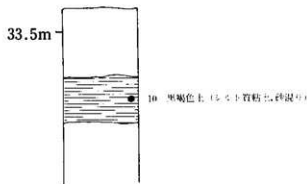
#### 引用文献

- 川村智子（1977） 東北地方における湿原堆積物の花粉分析的研究とくにスギの分布について。第四紀研究18, P79～88
- 辻誠一郎（1977） 秋田県玉川温泉地域の中積世鹿湯層の花粉分析。東北地理29, P162～167
- 辻誠一郎（1981） 秋田県の低地における完新世後半の花粉群集。東北地理33-2, P81～88
- 鈴木功夫・中村純（1977） 稲科花粉の堆積に関する基礎的研究。文部省科研費特定研「古文化財」 「稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究—中間報告—」（中村純編）、P1～10

ホイド井泉跡西壁土層



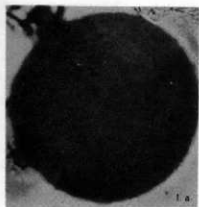
畑地東壁土層



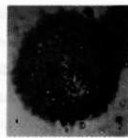
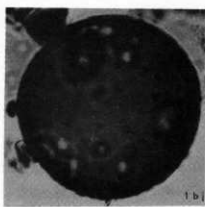
花粉分析 図1 花粉分析試料採取地点柱状図・主要花粉・孢子化石ダイアグラム

Sample No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
<i>Taxus</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
<i>Haploxyton</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i>	-	-	-	2	1	4	6	10	1	17
<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
<i>Cryptomeria</i>	1	-	-	1	7	63	133	164	23	82
T. - C.	-	2	-	-	-	13	11	5	-	5
<i>Salix</i>	-	-	-	3	2	12	9	13	12	10
<i>Pterocarya</i>	1	-	-	1	1	7	3	5	9	2
<i>Ingleton</i>	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-
<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	-	-	2	5	12	10	7	12
<i>Corylus</i>	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Betula</i>	-	-	-	-	1	-	1	-	-	2
<i>Alnus</i>	2	-	1	2	-	43	80	99	79	21
<i>Fagus</i>	-	-	-	1	1	3	8	19	2	30
<i>Lepidobalanus</i>	1	-	-	3	-	13	38	55	75	40
<i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	-	1	-	-	-	3	4	2
<i>Castanea</i>	-	-	-	-	-	-	-	19	5	2
<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	-	-	-	3	4	11	2	1
<i>Celtis - Aphananthe</i>	-	-	-	-	-	-	-	4	-	3
Moraceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Leguminosae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2
<i>Oriza</i>	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
<i>phellodendron</i>	-	-	-	-	-	1	5	2	2	-
<i>Rhus</i>	1	-	-	-	-	-	4	7	3	3
<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	6	3	12	1	1
<i>Asocitrus</i>	-	-	-	-	-	10	20	47	41	2
Araliaceae	-	1	-	-	-	-	-	1	2	-
<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Syrax</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
<i>Fraxinus</i>	-	-	-	1	-	7	4	7	10	5
<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Lonicera</i>	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
<i>Thuja</i>	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
<i>Polystachyon</i>	1	-	-	-	-	4	2	4	-	1
<i>Alisma</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Scitaceae	-	-	-	-	-	-	-	2	-	74
Gramineae	24	5	3	24	45	35	69	210	16	739
Cyperaceae	10	11	2	11	14	67	36	30	3	145
<i>Monochoria</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	20
<i>Iridaceae</i>	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
Moraceae	-	-	-	1	-	6	2	4	1	1
<i>Rumex</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Persicaria - Echinocaulon</i>	2	1	15	8	5	6	10	18	-	2
<i>Polygonum</i>	-	-	-	-	-	1	2	-	-	1
<i>Fagopyrum</i>	2	1	-	2	-	-	-	-	-	-
Chenopodiaceae	1	1	1	8	1	38	46	35	-	7
Amaranthaceae	-	-	-	-	-	1	-	2	-	1
Caryophyllaceae	8	3	3	4	3	8	11	7	-	2
<i>Nyphar</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Thalictrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Ranunculaceae	-	-	-	-	1	1	3	6	4	8
<i>Maclean</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Cruciferae	1	2	-	2	4	8	8	6	7	1
<i>Sanguisorba</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-
<i>Euphorbia</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
<i>Pachysandra</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Impatiens</i>	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1
<i>Rubia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Halenopsis</i>	20	2	-	-	1	2	-	-	-	10
<i>Myriophyllum</i>	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Umbelliferae	-	-	-	-	-	-	3	6	2	1
<i>Gentiana</i>	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-
<i>Menyanthes</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nymphaeoides</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Labiatae	-	-	-	-	-	1	3	-	-	-
<i>Plantago</i>	1	-	-	-	-	2	3	5	-	4
<i>Patrinia</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Artemisia</i>	12	8	7	17	30	213	213	135	6	62
Carduoideae	3	3	2	-	5	38	19	6	2	6
Cichorioideae	1	6	1	-	-	3	2	-	-	4
Unknown	4	4	-	2	2	16	20	21	11	7
<i>Lycopodium</i>	32	21	3	-	1	2	8	-	-	3
<i>Selaginella</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Obmunda</i>	11	12	11	19	2	11	19	10	7	1
<i>Selagin nanae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9
Other Pteridophyta	347	642	960	274	73	240	253	202	58	71
<i>Sphagnum</i>	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pseudoschizaea</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
AP	7	3	2	17	15	194	357	502	278	245
NAP	86	43	35	78	110	741	536	484	43	1101
Unknown	4	4	0	2	2	16	20	21	11	7
FS	390	675	975	293	76	253	280	212	65	84
TOTAL	487	725	1012	390	203	204	1193	1219	397	1437

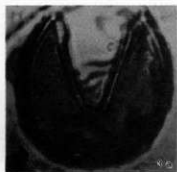
花粉分析 表 1 弘田橋脚試料 花粉分析結果



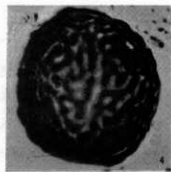
イネ科



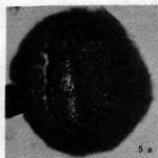
オモダカ属



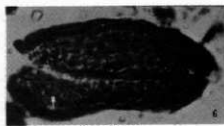
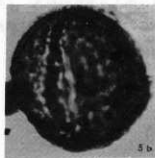
スギ属



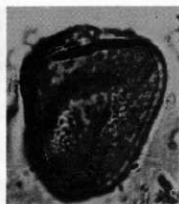
ニレ属-ケヤキ属



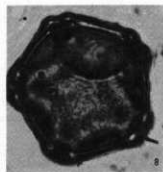
コナラ亜属



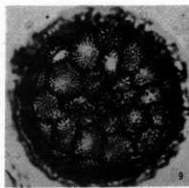
ミズアオイ科



カヤツリグサ科



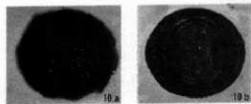
ハンノキ属



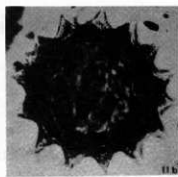
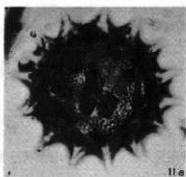
サナエクデ属-ウナギツカミ属

0 50 μ (No. 9)

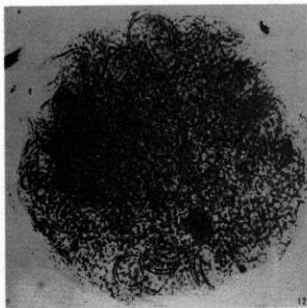
0 50 μ (No. 1 ~ 8)



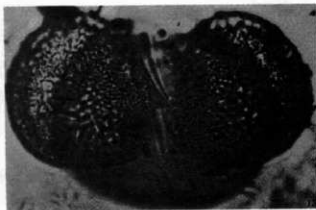
ヨヨギ属



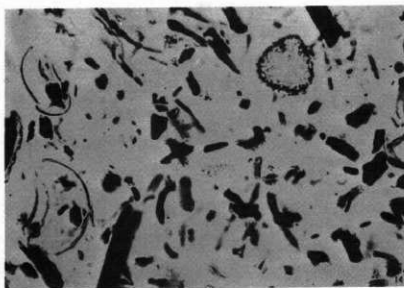
キク亜科



サンショウモ



マツ属



状況写真

0 30 μ (No.11)  
100 μ (No.12-14)

0 50 μ (No.10-13)



## 第9章 木簡集成

この木簡集成は昨年度刊行した「弘田權跡Ⅰ—政庁跡—」に掲載したものであるが、その後の釈文の変更と誤植および墨書痕をもつ木器の木簡の登録換えなどがあったので、再度掲載することにしたものである。

### 第1号木簡

□件補請取 閏四月廿六日 寺書生仙□氏監

(223) × 24 × 5 019


### 第2号木簡

[事。]

- ・ 鮑海郡少隊長解 申進□□□□
- ・ □六月十二日 少隊長春日□繼

294 × 29 × 7 011

### 第3号木簡

- ・ □十火 大換二石八斗八升
- ・ □二斗八 

(153) × 23 × 5 019

### 第4・5号木簡

[死。]

- ・ 嘉祥二年正月十日下午日紀□年料

[合。] [東。] [別筆] [二。]

- ・ 三千八百卅四□ 「勤了 正月十□

237 × 22 × 5 011

### 第6号木簡

- ・ □如件 

[強。]

- ・ □直□□

(72) × 31 × 2 081

## 第7号木簡

墨痕が認められる

(58) × (17) 091

## 第8号木簡

□九月□

(59) × (25) 091

## 第9号木簡

墨痕が認められる。

(30) × (32) 091

## 第10号木簡

墨痕が認められる。

(118) × 33 × 6 019

## 第11号木簡

□□

(26) × 21 × 4 019

## 第12号木簡

□□□□□□□□

(131) × (21) × 6 081

## 第13号木簡

□解 申請□□

(75) × (22) × 3 081

## 第14号木簡

・ □□□□□□□□

・ □□□□□□□□

(111) × (14) × 3 081

## 第15号木簡

・ □□□□□□ 貳佰枝進

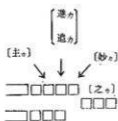
・ □□□□□□□□ 若櫻マ弓

〔寶〕

□□□字四年六月廿六日

(195) × 22 × 5 019

第16号木簡



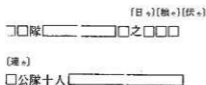
(170) × 32 × 6 019

第17号木簡

×解 申請借符×

(112) × 22 × 4 081

第18号木簡



(256) × (106) × (27) 081

第19号木簡

長五尺五寸七分「□」 万呂

「□」  
 □□ 経師万呂 万呂  
と と と と

(232) × 35 × 8 059

第20号木簡

「足」  
 □ 〱 腐 □ 〱 子土女万呂 〱 大 □

(172) × (14) × (1) 091

第21号木簡

「版」  
 □長

(145) × (23) × 6 081

第22号木簡

□□

(101) × (13) × (1) 091

## 第23号木簡

墨痕が認められる。

 $281 \times (6) \times 4$ 

081

## 第24号木簡

墨痕が認められる。

 $(71) \times (10) \times (2)$ 

081

## 第25号木簡

墨痕が認められる。

 $(47) \times (18) \times (4)$ 

081

## 第26号木簡

墨痕が認められる。

 $(73) \times (11) \times (6)$ 

065

## 第27号木簡

墨痕が認められる。

 $(126) \times (6) \times (7)$ 

065

## 第28号木簡

墨痕が認められる。

 $(131) \times (11) \times (17)$ 

065

## 第10章 調査成果の普及と関連活動

### 1 諸団体主催行事への協力活動

月日	行事の名称	主 題	主 催 者
4.19	郡内史蹟めぐり	弘田柵跡の概要	神岡町立平和中学校
4.24	郷土学習	弘田柵跡の概要	千畑村立千畑中学校
5.10	郷土学習	弘田柵跡の概要	西木村立松木内中学校
5.20	郷土研修	弘田柵跡の概要	仙北町教職員
5.21	研 修 会	弘田柵跡の概要	天王町中学校PTA
5.24	郷土学習	弘田柵跡の概要	大曲市立藤木小学校
5.30	研 修 会	弘田柵跡の概要	沼館小学校PTA
6. 5	郷土学習	弘田柵跡の概要	大曲市立大曲第二小学校
6.14	郷土学習	弘田柵跡の概要	千畑村立千畑南小学校
6.17	郷土学習	弘田柵跡の概要	仙北町立仙北南小学校
6.18	郷土学習	弘田柵跡の概要	千畑村立千屋小学校
6.18	郷土学習	弘田柵跡の概要	西仙北町立刈和野中学校
6.19	郷土学習	弘田柵跡の概要	西仙北町立刈和野中学校
6.20	郷土学習	弘田柵跡の概要	雄和町立川添小学校
6.21	郷土学習	弘田柵跡の概要	城南中学校PTA
6.22	研 修 会	弘田柵跡の概要	奥羽史談会
6.26	研 修 会	弘田柵跡の概要	三梨小学校PTA
6.26	研 修 会	弘田柵跡の概要	山内村郷土史編さん
7. 1	研 修 会	弘田柵跡の概要	角館町公民館
7. 3	研 修 会	弘田柵跡の概要	協和町船岡農協
7. 3	研 修 会	弘田柵跡の概要	浅舞小学校PTA
7. 9	郷土学習	弘田柵跡の概要	太田町立太田東小学校郷土クラブ
7.14	研 修 会	弘田柵跡の概要	納税組合
7.19	研 修 会	弘田柵跡の概要	阿仁町公民館
7.26	研 修 会	弘田柵跡の概要	千畑村文化財保存会
7.26	研 修 会	弘田柵跡の概要	県海外研修一期生

7.31	郷土学習	弘田柵跡の概要	湯沢市立須川中学校
8.2	研修会	弘田柵跡の概要	増田小教諭
8.23	研修会	弘田柵跡の概要	仙北町史談会
9.18	研修会	弘田柵跡の概要	水沢市教育委員会
9.30	研修会	弘田柵跡の概要	横手・湯沢消防署
10.1	研修会	弘田柵跡の概要	湯沢市中央公民館
10.9	研修会	弘田柵跡の概要	雄勝町婦人退職教師の会
10.19	郷土学習	弘田柵跡の概要	六郷町立六郷小学校
11.6	研修会	弘田柵跡の概要	西目農業高校PTA
11.8	研修会	弘田柵跡の概要	大海村青少年健全育成協議会
11.20	研修会	弘田柵跡の概要	秋田大学

(この他、調査現場において多数の各種研修団体に現地説明を行った。)

## 2 顧問会議の開催

第22回 顧問会議 昭和60年9月4・5日

第23回 顧問会議 昭和61年2月13・14日

## 3 研究発表・執筆

山崎文幸 「弘田柵跡出土の文字資料 - 表採・寄贈資料 -」 『うもれ木』11号 仙北町史談会 1985 (昭和60年3月)

船木義勝・山崎文幸 「史跡弘田柵跡の政庁と変遷」 『第51回日本考古学協会発表要旨』 1985 (昭和60年4月28・29日)

船木義勝 「弘田柵跡の政庁 - 付 出土文字資料 -」 『日本歴史』 第450号 吉川弘文館 1985 (昭和60年11月)

岩見誠夫・船木義勝 「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」 『秋大史学』 第32号 秋田大学史学会 1985 (昭和60年11月15日)

船木義勝・山崎文幸 「弘田柵跡(第60・61次調査成果)」 『第12回古代東北城柵官衙遺跡検討会資料』 1986 (昭和61年2月8・9日)

船木義勝 「秋田城跡についての一考察 - 8世紀の土器と施設の創建年代 -」 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第1号 1986 (昭和61年3月31日)



図版1 第60次調査

1 調査前(東▶西)

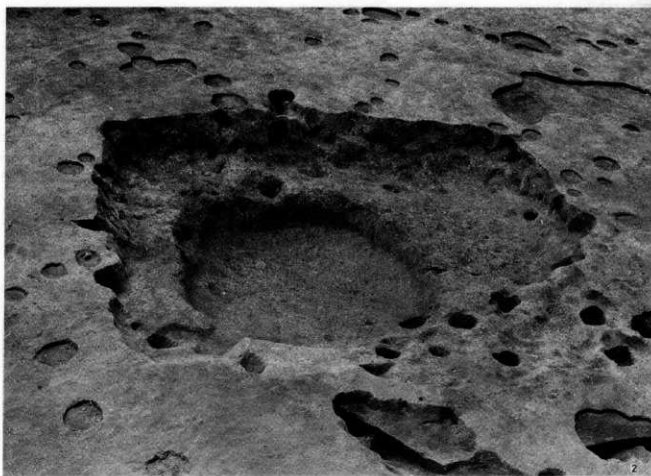
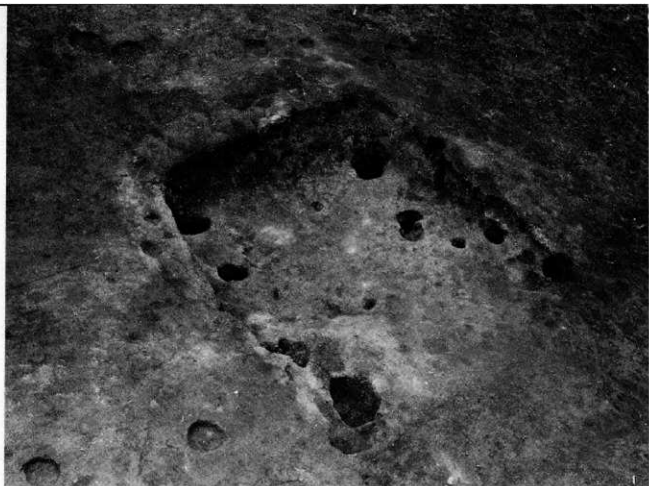
2 調査前(西▶東)



図版 2 第60次調査

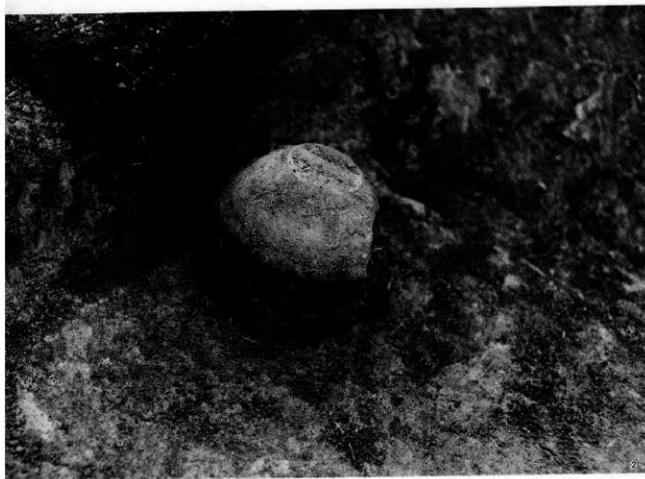
1 調査区全景(北東▶南西)      2 調査区近景(北東▶南西)





図版3 第60次調査

1 S1731[北東▶南西]    2 S1734・SK779[北東▶南西]



図版4 第60次調査  
1 S 1735(北▶南) 2 S 1735 遺物出土状態



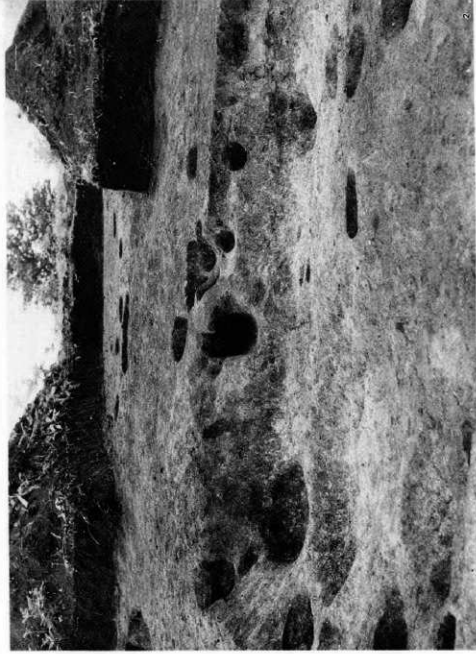
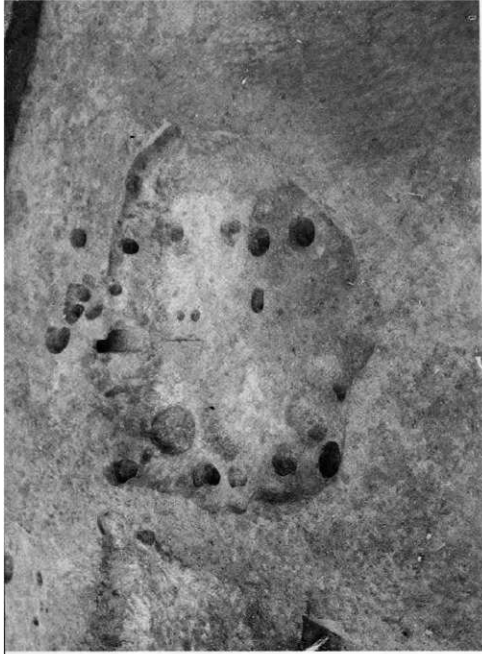
図版 5 第60次調査  
1 S 1736〔北▶南〕 2 S 1736炭化種子出土状態



図版 6 第60次調査

1 S I 738 (北▶南)

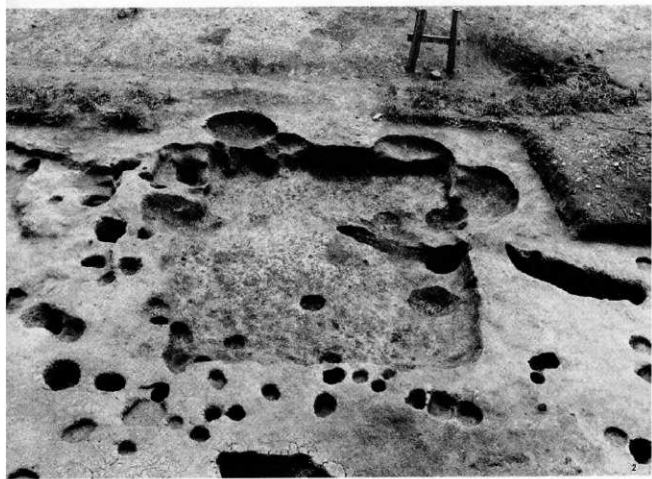
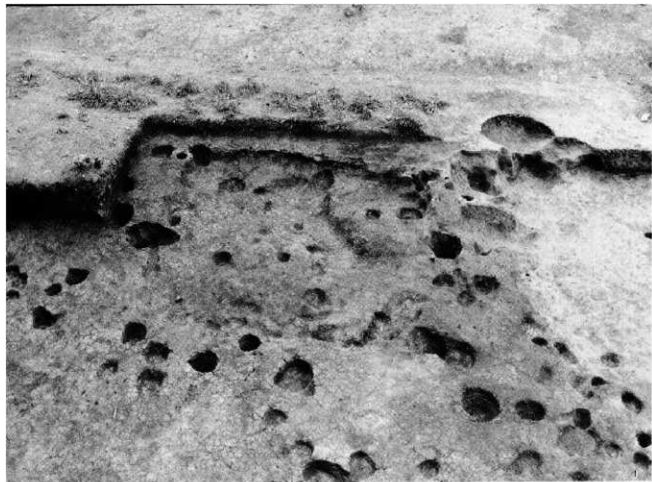
2 S I 738 遺物出土状態



図版7 第60次調査

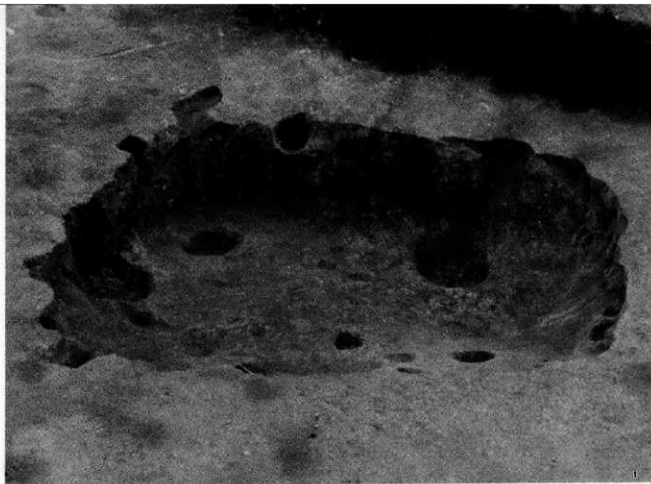
1 S1745(北▶南)

2 S1745(北▶南)



図版 8 第60次調査

1 S 1764(北▶南) 2 S 1765(北▶南)



図版 9 第60次調査

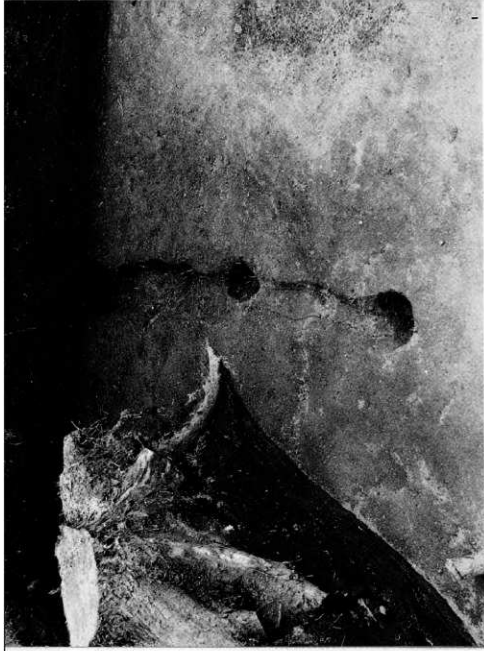
1 SK741〔北▶南〕    2 SK741 遺物出土状態



図版10 第60次調査

1 SD767全景〔西▶東〕      2 SD767・778〔南▶北〕





圖版11 第60次調査

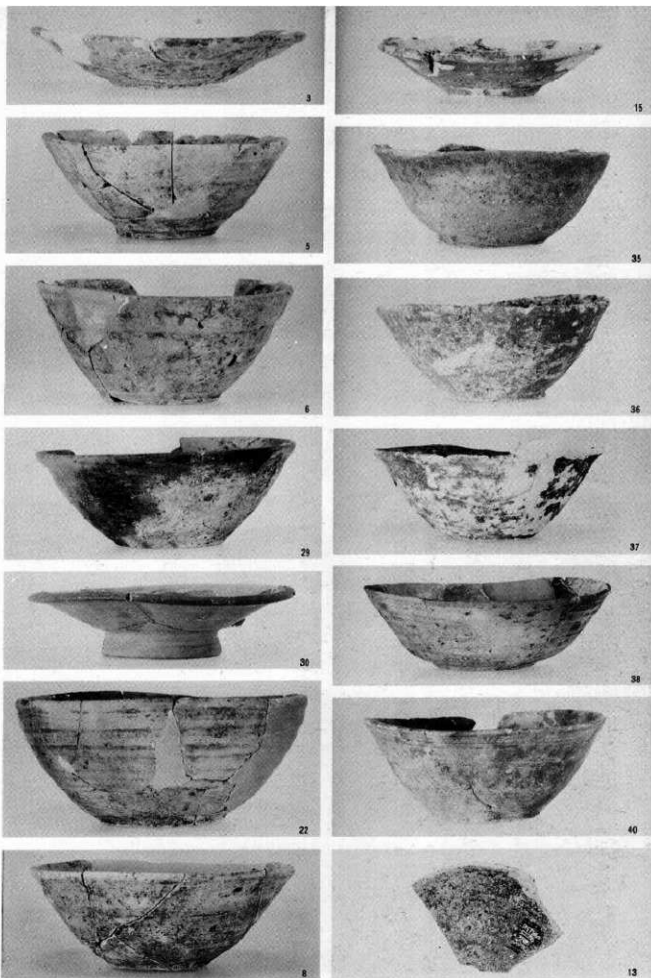
1 S D774(西▶東)

2 S K773(北▶南)



図版12 第60次調査

1 SX769〔北▶南〕    2 SD767・SD774間開口部〔南▶北〕



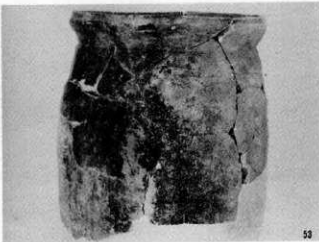
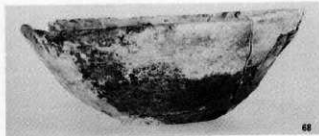
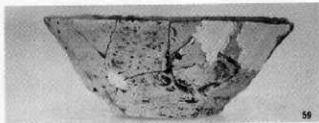
図版13 第60次調査  
 出土遺物①



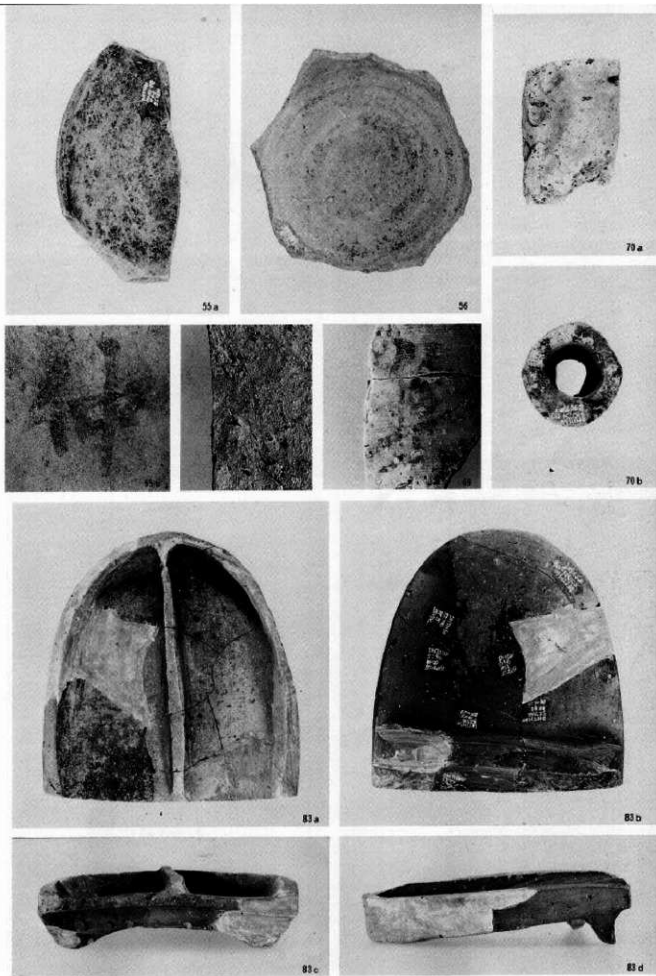
図版14 第60次調査  
出土遺物②



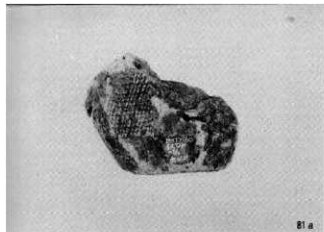
图版15 第60次調査  
出土遺物 ③



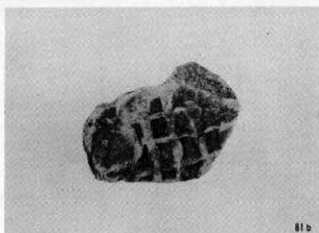
図版16 第60次調査  
出土遺物④



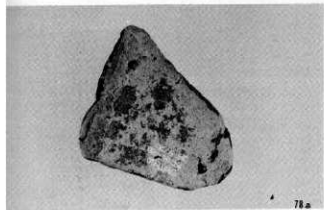
図版17 第60次調査  
出土遺物 ⑤



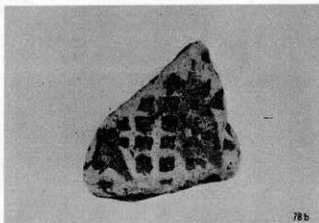
81 a



81 b



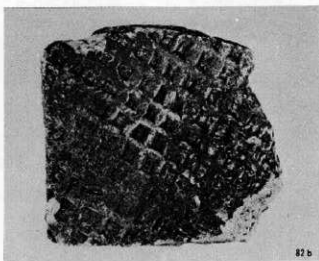
78 a



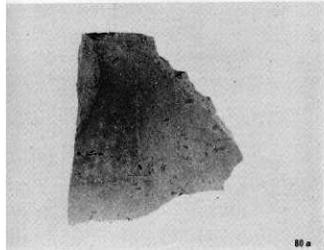
78 b



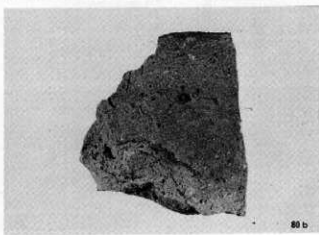
82 a



82 b



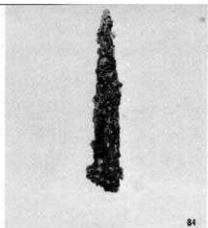
80 a



80 b

図版18 第60次調査  
出土遺物⑥





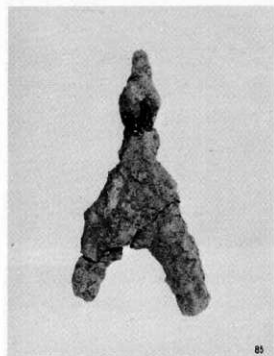
84



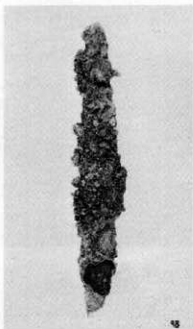
87 a



87 b



85



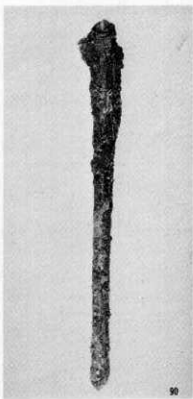
88



89



86

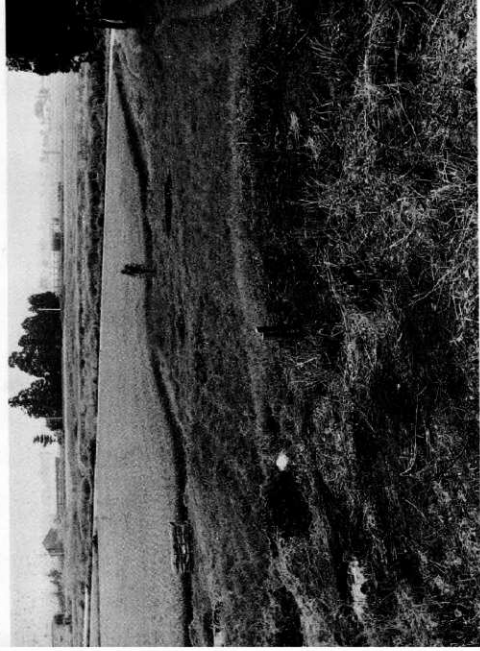


90



91

図版19 第60次調査  
出土遺物 ⑦



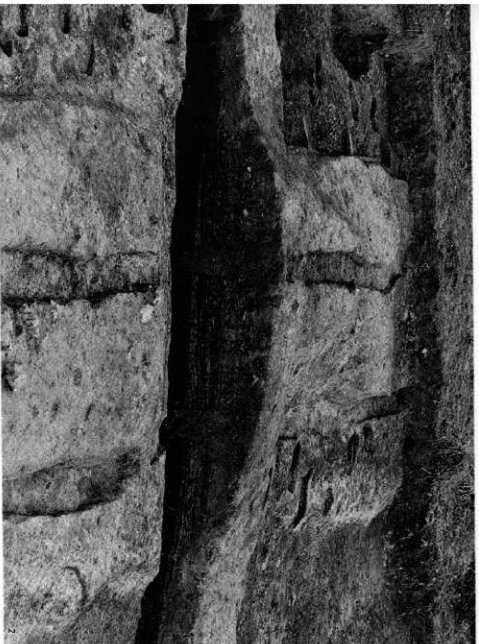
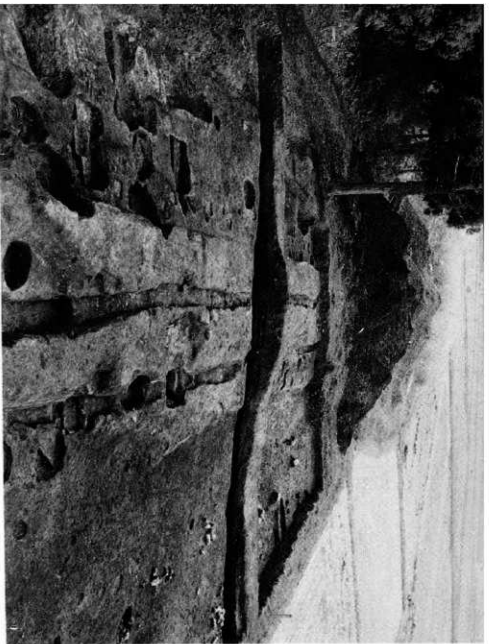
図版20 第61次調査  
1 調査前(東▶西) 2 調査前(西▶東)



図版21 第61次調査

1 調査区全景〔東▶西〕

2 調査区全景〔西▶東〕



図版22 第61次調査

1 SF78全景(東▶西)

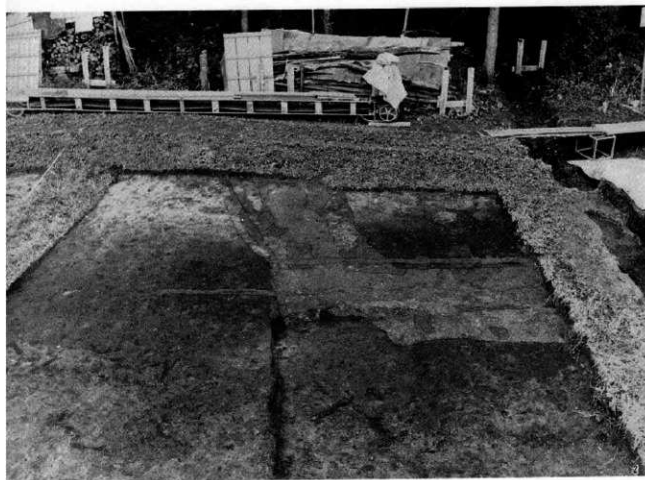
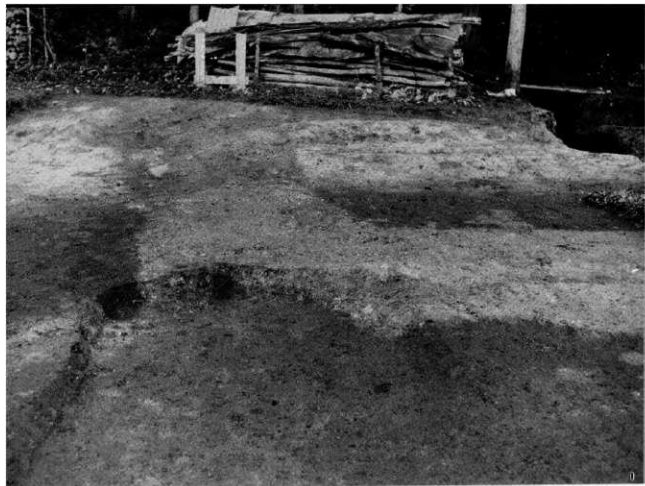
2 SF75土層(東▶西)



図版23 第61次調査

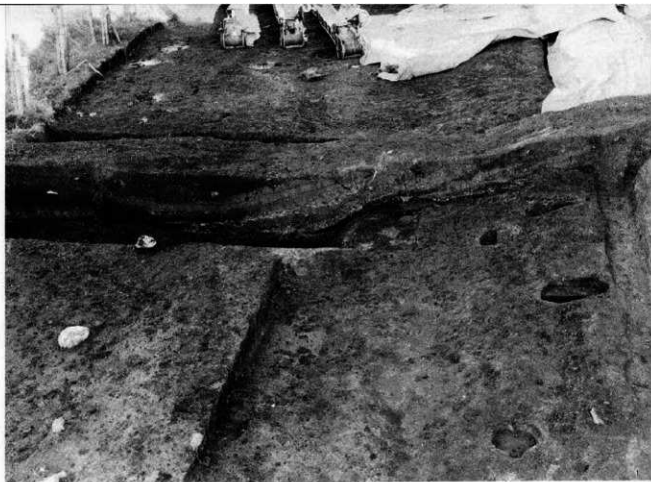
1 SF75近景(東▶西)

2 SD76・77全景(東▶西)



図版24 第61次調査

1 SD76・77近景〔北▶南〕      2 SD76・77近景〔北▶南〕



図版25 第61次調査

1 Bベルト東壁土層〔西▶東〕

2 遺物出土状態



図版26 第61次調査

1 SB・SA全景(東▶西)    2 SB79-3柱(北東▶南西)





図版27 第61次調査

1 SB80-6柱〔東▶西〕

2 SA78-86-3柱〔北▶南〕



図版28 第61次調査

1 SB79-4柱〔東▶西〕

2 SA84・85-3柱〔東▶西〕



図版29 第61次調査

1 SA785近景〔南▶北〕

2 SA785近景〔東▶西〕



図版30

第61次調査

1 SD76土層(西→東)

2 SD77土層(西→東)



図版31 第61次調査

1 SK786(東▶西)

2 SK786土層(東▶西)



图版32 第61次調査

1 S D783・784全景(北▶南)

2 S X781・782(南▶北)



図版33  
第61次調査  
1 Aトレンチ全景  
〔北▶南〕  
2 Aトレンチ土層  
〔北西▶南東〕





96



95



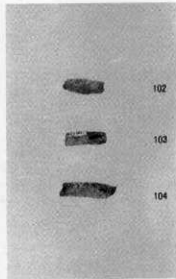
99



100



94



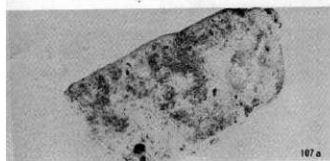
102

103

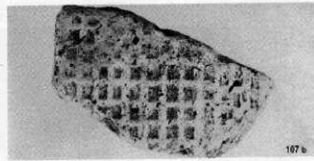
104



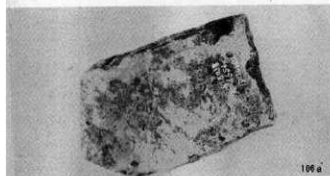
105



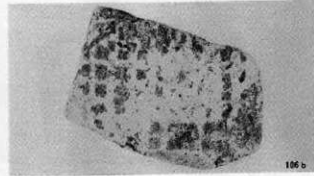
106 a



107 b



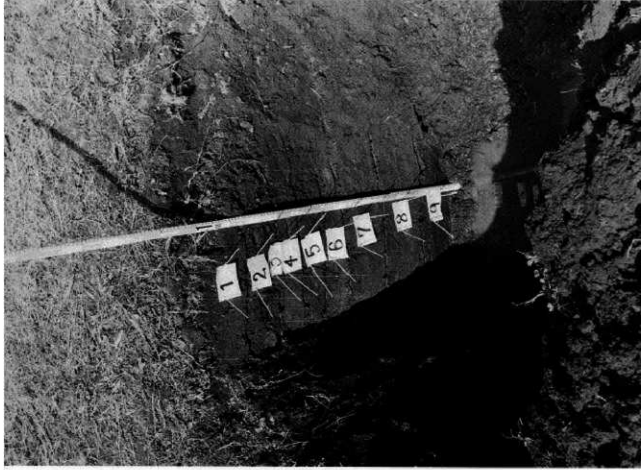
106 a



106 b

図版34 第61次調査  
出土遺物



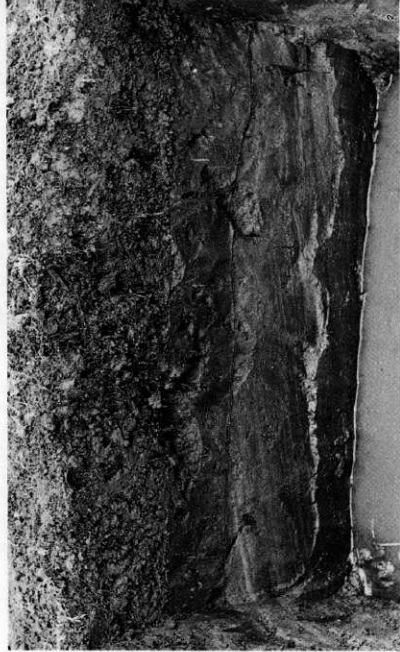


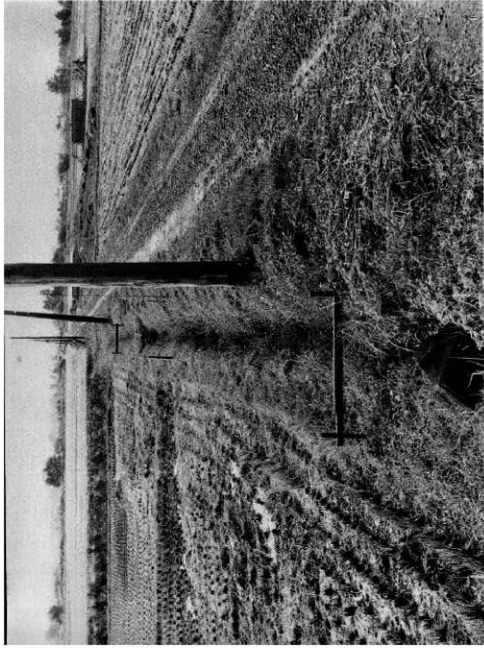
図版35

第62次調査

1 試料No.1~9採取  
地点土層 (東▶西)

2 試料No.10採取  
地点土層 (西▶東)

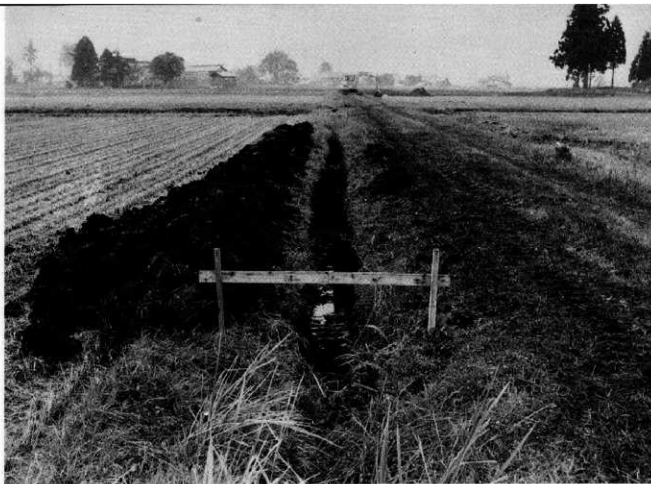




圖版36 第63次調査

1 調査坑(北▶南)

2 SA308(北▶南)



図版37 第64次調査

1 Aトレンチ全景〔西▶東〕

2 Bトレンチ全景〔南東▶北西〕

## 弘田柁跡調査事務所要項

### 1 組織規定

秋田県教育委員会行政組織規則

#### 第6条（地方機関の設置）

名 称	位 置
弘田柁跡調査事務所	仙北郡仙北町

第7条 文化課の所掌事務は、次のとおりにする。

8 弘田柁跡調査事務所に関すること。

第8条 第2項 弘田柁跡調査事務所の所掌事務は、次のとおりとする。

1 史跡弘田柁跡の発掘およびこれに伴う出土品の調査研究に関すること。

### 2 職員

(昭和61年3月現在)

職	氏 名	備 考
所 長	岩 見 誠 夫	兼務 埋蔵文化財センター副所長
学 芸 主 事	船 木 義 勝	兼務 埋蔵文化財センター学芸主事
主 事	山 崎 文 幸	仙北町教育委員会派遣職員
主 査	加 藤 進	本務 埋蔵文化財センター主査
社会教育主事	大 野 憲 司	本務 埋蔵文化財センター社会教育主事
主 事	佐 藤 健	本務 埋蔵文化財センター主事

### 3 顧問

弘田柁跡調査事務所の発掘・調査研究を適正に実施するため、顧問を委嘱。

顧問 新野直吉（秋田大学教育学部教授 古代史学）

顧問 岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授 考古学）

## 調 査 参 加 者

**発掘作業員** 杉沢 毅・佐々木重治・菅原龍助・森川暁二・大川徳治・後藤龍男  
高柳龍太郎・菅原謙蔵・菅原道明・森川剛右エ門・渡辺義美  
藤井幸誠・小林 弘・越後谷哲也・熊谷道宏・小山内 透・越後谷慎一  
森川友三郎・大川専治郎・森川光博・大釜康次・竹村豊之助・伊藤綱人  
大川タエ子・大釜フヂ・千葉クミ子・千葉ケイ・千葉良子

**整理作業員** 藤倉寿枝・森元京子・柳田良子・鈴木修子・伊藤順子・石崎富佐子  
小西睦子・熊谷雅子・伊藤啓子

---

### 秋田県文化財調査報告書 第139集

---

弘田柵跡調査事務所年報1985

#### 弘 田 柵 跡

—第60次～64次調査概要—

印刷・発行	昭和61年3月31日
編 集	秋 田 県 教 育 委 員 会 弘 田 柵 跡 調 査 事 務 所 〒014 仙北郡仙北町弘田字牛嶋20番地 TEL (0187) 69-2442
発 行	秋 田 県 教 育 委 員 会 〒010 秋田市山王四丁目1番2号 TEL (0188) 60-2222
印 刷	精 巧 堂 印 刷 所 〒014 大曲市丸の内町3-5 TEL (0187) 62-2340

---